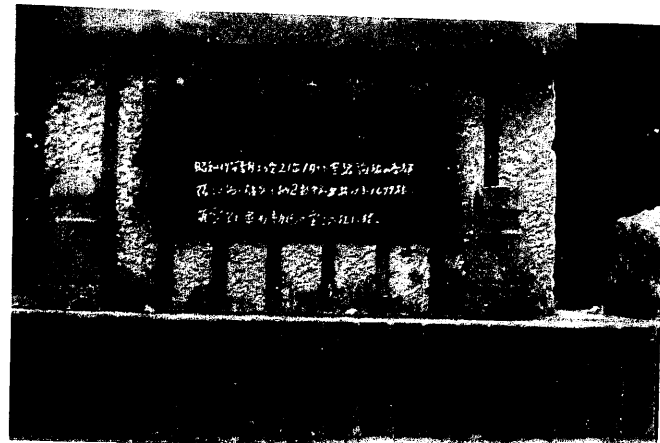


宮古の主なる官民指導者 (昭和15年秋)

前列左から平良町助役下地徹 平良区裁判所判事島袋全道 宮古警察署長代理 宮古民友新聞記者
 新城盛雄 野津伝一 富永岩雄 宮古民友新聞社長潮名波道 上江利栄徳 宮古支庁長獲得久朝島
 県立宮古中学校長許田善正 宮古税務署長上原竜助 冲積宮古工場長宮城仁四郎 2列目(左から
 4人目)名瀬山愛潤 西平實信(7人目)池畑運送店切通庵代彦(9人目)嵩原重夫 右端池村恒
 章(後列左から)座喜味朝奉 下地寛良(4人目)友利電夫医師 専売局宮古出張所島村俊男(7
 人目)当岡林光少尉 下地盛寿 平良町収入役池間盛増 郡農会砂川寛信 下地馨 勝連盛金 友
 利明令 宮古時報記者下地明春(敬称略) (宮古民友新聞創刊20周年を記念して)



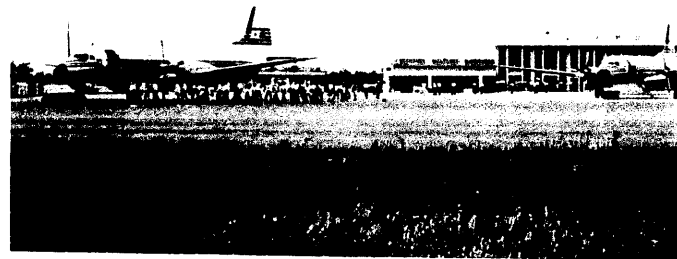
昭和46年1月野口運瀧氏(佐賀県鳥栖市)が建立した
 皇魂の社(野原越)下は神面



第一部 作戦準備から終戦まで



戦後発展した平良港全景
2000トン級の貨客船の出入も出来海の玄関として賑わっている



富古の空の玄関平良空港
旧海軍飛行場を整備拡張して完成した近代的飛行場 今では68人
乗りのYS機が一日七便ナハ間を往復している

第一章 連合軍の攻勢と先島群島の防衛

(1) 航空決戦に備えて飛行場設定

ニミッツ大將の率いる米中部太平洋進攻軍の鋒先が内南洋に向けられ始めた昭和十九年初頭先島群島には西要要塞部隊、南方との中継基地としての海軍飛行場、地元編成による特設警備隊(宮古・八重山にそれぞれ二個中隊、平常は將校、下士官数名が所在、動員下令によって部隊を編成する。武装は小銃のみ)及び小規模の陸海軍通信隊が所在するだけで、まさに兵装ストリップとも云うべき状態だった。

米中部太平洋軍の進攻速度が予想以上に早いことに驚いた大本営は米軍はその強大な機動力を駆使してヒリップピン、台湾又は小笠原諸島を飛び越えて一気に南西諸島に突進して来る公算も少なくないとして急ぎ同方面の防備強化を図る要ありと判断、三月中旬大本営參謀杉田一次大佐を班長とする現地視察班を派遣して南西諸島の全域にわたって現地踏査を遂げしめた結果、これらの諸島は延々数百マイルにわたって航空基地の適地を形成、今後の航空決戦には第一級の要衝であり、速かに多数の飛行場を新設し、有力なる地上兵力を配置してこれを防衛するのが至当であると考えた。

越えて三月二十二日大本営陸軍の第三十二軍(軍司令官渡辺正夫中將、參謀長北川深水少將)が編成され、遅ればせながら南西諸島防備はようやく緒についた。然しこの時点では航空戦力達成が第一義とされ、第三十二軍に編入予定された兵力は僅かに独立混成旅団二個と歩兵一個聯隊に過ぎなかった。当時戦火は未だ南洋やヒリップピン近く迄は及んで居らず且又大本営は内南洋東北戦線の強化に迫られ、南西諸島の防備強化は手回らなかつた。従って防備力も敵の小規模奇襲に備えることが主眼であった。

南西諸島の防衛を担任した第三十二軍は直ちに先島群島の現地視察に乗り出し、三月中旬先ず八原高級參謀、同三十日には渡辺軍司令官が樺僚を帯同して米島、引き続き五月十四日船船參謀八坂少佐、同十五日航空參謀釘宮中佐、六月十二日には渡辺軍司令官が再度米島するなど軍首脳の出陣を接し、その動静はようやく窺えた。これら一連の視察の結果、宮古島は島全体が平坦に起伏に乏しく、航空基地としては最適であると判断され、大本営では既設の海軍飛行場(平良町鏡原地区)の外に下地村東南部に二個所(城辺村加治道にも計画されたが、のち中止された)の飛行場を大急ぎで建設することを決め、この工事にあたため、満州から第三〇五飛行場大隊(吉岡軍一郎大尉、のちに少佐、兵力およそ五百名)が転用発令(三月二十二日)四月三日ハルビン、孫兵を出発、釜山、沖繩經由で五月八日渚水港に上陸、町内西里の上下織物工業組合事務所本部を構え、飛行場設定に着手した。これより先き五日には要塞建築第八中隊(兵力およそ百名、岸川善二大尉)が門司經由、到着している。この部隊は主として野原岳戰鬥司令部の築造にあたった。

この頃の宮古地区は決戦下とは思えない程人心も平穩で差し迫った危機感を感じられなかった。勿論深刻な物資不足と動員徴用に伴なう生産の低下で日常生活は著しく窮乏となり、街には国民服やモンペ姿が増え戦時気分は横溢していたが、官民の戦意は聊かも衰えず、防空演習や軍事施設の設定のための勤勞奉仕にも積極的に協力することをおまなかつた。食糧は昭和十五年から主食の米が配給制となり、十分ではなかったが、海上交通は細々ながら維持されていたのでさほど深刻ではなかつた。

た。

しかし五月に入って陸軍の正規部隊が送り込まれ、街にはカーキ色が氾濫、これと併行して二カ所の陸軍飛行場工事が急ピッチで進められ、多数の老若男女が作業員されるに及んで一般市民の間には次第に戦局の前途が容易ならざるものであることが認識せられるようになり、且有識者の間には相次ぐ玉碎、船舶の遭難（昭和十八年秋から米にかけて貨客船嘉慶丸二、五〇九トンと同じく湖南丸二、六六四トン）が何れも大島近海で米潜水艦の雷撃を受け沈没、犠牲者多数を出す）などがさやかれ、一種の厭戦敗戦感か湧き始めていた。

（註）昭和十六年六月以降主なる船舶は船舶運営会の手で管理運営された。当時宮古一那覇一基隆間の海上輸送は主として慶運丸一大阪商船一、九二一トン）と小型機帆船によって維持されていたが、十九年夏以降は軍輸送船に依存するようになった。

飛行場工事は防諜上、緊急工事と云われ、下地村野原を中心に中飛行場、与那覇を中心に西飛行場、八月以降は第二十八師団主力も動員されて昼夜兼行の突貫工事が強行され、十月五日に完成した。西飛行場は地形上難点があり、重点は中飛行場に置かれた。この工事は機械力は用いられず、専ら人力により、工具もロビ、ツルハシと云う非近代的なものが主で、能率のあがらないことが多かったが、航空戦力を重視する中央の熱心な督励と現地軍官民一体となつての熱意と苦勞が実を結び、中五百メートル、長さ千五百メートルの滑走路二本と誘導路、掩体燃料貯蔵施設などが出来上がった。

（註）この飛行場用地の接収は昭和十八年十月から十九年五月にかけて行なわれ、海軍飛行場が五二二万五、一八二坪（地主一五五人）陸軍中飛行場が三十四万六、八二二坪（地主一一七名）西飛行場が十五万五、〇〇四坪（地主六十八名）で、買収には現金又は公債が支払われたが、陸軍関係は殆んど公債で、戦後支払い凍結されたが多い。現在この土地は國有地として大蔵省の國有財産土地台帳に記載されているが、最近では旧地主の間から返還を望む声が強くなり、戦後大きな未解決問題が出来上がった。

成第四十四旅団長に転じた鈴木繁二少将（26期）と共に福岡に至り四部軍司令官下村中将の命を受け、二十二日安路那覇へ向い、第三十二軍成軍司令官に申告、任務を付与された。当時第四十五旅団は香川、愛媛、高知、徳島の四県に於て徵發編成中で、未だ沖繩へは送られていなかった。（第四十四旅団は九州で編成中）渡辺軍司令官は兩旅団長に対し、沖繩の状況を説明し、急ぎ徴發区に戻り、現地の状況に即ずること、その編成状況を遺憾なく説明せよよう求めた。よつて兩旅団長は再び福岡に戻り、西部軍司令官への旨を報告、それぞれ旅団本部を巡回指導したのち、共に福岡経由、那覇へ戻り、宮崎旅団長は六月二十二日宮古島に到着、平良町西里の機物工場事務所に司令部を開設、所在部隊をその指揮下に収めた。六月中旬頃九州、四国地区で編成を終った独立混成第四十四、同四十五旅団主力は同月二十五日第三十二軍兵醫勤務隊、第百二十九野戦飛行場設定隊、宮古島陸軍病院などの要員と共に富山丸（七、〇八九トン）に乗船、鹿児島を出港して南下したが、二十九日あさ七時二十分頃徳之島東方沖で米潜水艦の雷撃を受け、一瞬にして沈没。乗船部隊およそ四千六百名中、三千七百名が遭難死するという全滅に近い損害を蒙った。生存者は奄美大島古仁屋に收容され、沖繩本島及び宮古島へ送られたが、指揮官クラスは殆んど死没して戦力なく、七月から九月にかけて再編整頓要員を本土から輸送し現地召集者を加えて再編成された。

富山丸の遭難により南西諸島の兵力配備計画はやり直しの必要に迫られ、防衛準備は初期に於て出鼻を挫かれた結果となった。大本営は沖繩本島及び大東島の急速配兵のため、部隊の空輸と艦艇輸送を計画し、また先島方面強化のため、第二十八師団（在テチル、歩兵第三十六聯隊欠）の第三十二軍編入を発令（六月三十日）引きつづき独立混成第五十九、同六十九旅団などの諸部隊を宮古地区に増兵することをきめ、九月末迄に配置を終った。然しこれらの部隊は状況の変化に応じて逐次投入されたため、現地軍の作戦準備は度々変更を余儀なくされ、地上作戦計画の遂行に影がらず支障を来たした。

決事項として尾を引いている。

(2) 先島守備隊の配備

昭和十九年二月十七日米機動部隊は日本聯合艦隊の根拠地トラック島を急襲、所在航空兵力及び艦船、軍事施設等に壊滅的打撃を与え、内南洋の守りは危殆に類した。このため南西諸島は米軍の意打を受けざる懸念が生じてきた。当時の南西諸島の兵備は僅かに中城、西表西表等と特設警備隊数個中隊が配備されているだけで、潜水艦による攻撃にも耐えられない状態だった。

三月には第三十二軍が編成されたもののその主力となるべき混成第四十四、同四十五旅団は未だペーバーランの域を脱せず、五月三日になつてようやく正式に第三十二軍の隷下に編入された。然し兩旅団共編成未完のため、沖繩到着は六月を待たねばならなかった。

五月二十日第三十二軍司令官は独立混成第四十五旅団長崎武之少将に対し、先島群島防衛の任務を与え、次の如く軍隊区分を命じた。

先島守備隊

- 長 独立混成第四十五旅団長
- 宮崎武之少将
- 部隊 独立混成第四十五旅団（主力は宮古島、一部は石垣島）
- 特設警備隊第二十九中隊、同第二十九中隊、第二十五飛行場大隊
- 宮古島陸軍病院、要塞建築勤務第八中隊（以上宮古島）重砲兵
- 第八聯隊、第百二十八野戦飛行場設定隊、特設警備隊第二百二十六中隊、同二百二十七中隊、船浮陸軍病院（以上八重山）
- 任務 東経一六六度以西東経一二二度三〇分以内たる先島及び尖閣列島の防衛並びに宮古、石垣西島の航空基地設定
- 先島守備隊長宮崎武之少将（26期）は五月十日付で豊後陸軍予備士官学校長より独立混成第四十五旅団長に転補、朝鮮の旅団長より独立混

(3) 満州から大兵力転用

これより先大本営では先島方面の防衛強化のため、第二十八師団の転用をきめ、六月三十日付で第三十二軍編入を発令した。同師団は昭和十五年七月、第一、第二、第九師団から歩兵一〇聯隊と特科部隊（砲、工、輜、騎兵）の基幹要員を抽出、内地から兵員を補充して編成された新設師団で、兵は少数の補充兵を除く外は殆んど現役、下士官は占め、特に現役、将校は尉官クラスが予備隊、佐官以上は大半が現役で占め、特に戦力の根幹となるべき歩兵部隊は日清、日露役の歴戦に輝く第三、三十三、三十六の各聯隊、砲兵は山砲隊で局地山地戦士に適すように裝備されていた。当時としては日本陸軍の精鋭師団の一つに算えられていた。師団は対少戦に備えてハルビンに駐留していたが、防隊上の理由その他で二月十四日テチルへ移動した。六月十八日歩兵第三十六聯隊（平野義一少佐、26期）は大本営から緊急派兵の命令を受け、二十二日テチルを出発して二十六日釜山に着いた。同日在比島第十四軍編入を発令、七月三日釜山出港後行先地が沖繩に変更されたことが判明、七日具から海軍艦艇で沖繩へ向かい、十日中午域湾に到着、同月中旬機帆船に分乗して大東島方面に送られ、同方面の警備に就いた。

一資料によると同聯隊は当初サイパンへ増援兵力として送られることになっていたが、状況急変のため中止、今度は在ヒルビリン第十四軍に編入され、マニラ行きが内定していたが、大東島方面の状況が急迫したため行先地が三度変更されたもので、七月四日付を以て第三十二軍編入となった。

六月二十六日大本営は第二十八師団に対し、上海集結を命じたが、三十日第三十二軍編入に伴い、集結地が釜山に変更され、七月一日頃から列車輸送でテチルへ出発、十五日頃釜山集結を終った。このよう先行地の目まぐるしい変更は当時のマリアナ集結の状況が急変、中央の対処策が度々手直しを余儀なくされたことを物語っている。

出戦に際し師團長は次の如く訓示し、全將兵の決意と団結を促した。

訓示

茲ニ、大命ヲ奉シ征途ニ就カントス男子ノ本懐ニ過クモノナシ
惟フニ兵團創設後四年ニ亘リ夙夜至至ノ訓練ニ邁進セシ所以ハ莫ニ今
日ニ備ヘンカガナリキヤ當司令部トシテモ至敵ナル軍紀ノ下鉄ヲノ団
結ヲ鞏メ又克ク部下部隊ト間ニ強靱ナル紐帯ヲ結成シ百難不撓ノ態勢
ヲ確立シ得タルモノト信ス

諸子亦今日ニ臨ミ自ラ深ク期スル所アルヲ信スモ今ヤ戦局ハ益々重
大ニシテ兵團ニ負荷セラルヘキ任務ハ正ニ至重至大ナルモノアルヲ予察
スルニ難カラス諸子ハ宜シク予ネテ訓練スル所ヲ想起シ司令部ノ責務ヲ
銘肝シテ万事ニ亘リ率先垂範スルト共ニ和親団結ヲ以テ衆心ヲ城ト為シ
準備ノ周到ヲ以テ常ニ待ツアルヲ持ムノ境地に達シ如何ナル大敵ヲモ粉
碎センハ己マサル敢闘精神ヲ夫々突敵ニ対シテ実証シ真個タル兵團ノ
伝統精神トシテ之ヲ確立センコトヲ期セザルヘカラス
諸子夫レ自重自愛シ各々本分ノ完遂ニ聊カ憚忌ナク且其武運ノ多幸ナ
ランコトヲ祈ル

右訓示ス

昭和十九年七月二日

第七八六隊長

以上のような一札を経て第二十八師団の宮古島転用がきまり、師團長
柳瀬一中将(24期)は七月九日飛行機でチチハルを出発、奉天経由由
一日釜山に到着、師團主力の輸送指導にあたり、これより先參謀長福
地春男大佐(32期)は部下を伴って七月五日那覇に先行、第三十二軍
司令部へ出頭して諸般の打ち合わせを行なったのち、七日宮古島へ乗り
込み、県立女学校を司令部にあて作戦準備に取りかかった。
柳瀬師團長は陸路參謀、堀江専副官を帯同、十六日釜山出發、空路
福岡經由沖繩へ向い、十八日那覇に到着、第三十二軍渡辺軍司令官に到
着を申告、諸般の打ち合わせを行なったのち二十日宮古島へ進出した。

於て野砲より劣るのが短所とされている。

(4) 長少將の現地視察

六月三十日第二十八師団の宮古島方面配置がきまり、大本営はようや
く南西諸島の防衛準備に本腰を入れたが、七月七日長少將(28期
)の一行が大本営から派遣され、宮古島を訪れた。同少將は関東軍總司
令部付として在満していたが、六月中旬サイパン島奪回作戦の要員とし
て東京へ招致された。然しマリアナ沖海戦で聯合艦隊が一敗地に塗られ
た結果、サイパン島放棄がきまり、同少將は六月二十七日參謀本部付と
なった。大本営は第三十二軍の作戦援助のため、長少將を沖繩へ派遣し
た。同少將は沖繩本島を始め大東島などの兵備を視察研究すると共に非
戦斗員の疎開についても研究する使命を帯びていた。

長少將は第二十八師団の宮古島進駐準備のため、七日宮古島に先行した
師團參謀長福地春男少將(32期)及び独立混成第四十五旅団長宮崎武之
少將と会い、先島防衛作戦準備について研究討議すると共に二日間にお
たて現地を踏査、九日次の要旨の電報を參謀次長へ送った。

一、七日及び八日宮古島を偵察し、同島の配備と戦法について独立混
成第四十五旅団長と派遣された第二十八師団參謀長に了解させた
二、宮古島は各方面から上陸可能で攻め易く守り難い。米軍が同島を
占領すれば一月で一、五〇〇機、周囲の小島と共に二、〇〇〇
機の大航空機隊を設定し得るものと判断せられる。宮古島は本
土の航空燃料を瀕瀕させる目的で南西諸島攻略のため米軍が指向
する攻撃重点と判断す。

三、宮古島確保のためには一師団と一旅団、また伊良部島には一
旅団の守備兵力は絶対必要である。裝備として迫撃砲のほか爆
薬少くとも七トン及び発煙剤をなるべく多くすることが絶対必
要である。

四、宮古島は水の問題が重要で、作井隊(井戸を掘る部隊)一〇を急

これより先き七月十四日第三十二軍司令官は第二十八師団長に対し「一
部ヲ以テ西表島及石垣島、主力ヲ以テ宮古島地区ノ防衛ニ任スルト共ニ
宮古島及石垣島ノ航空作戦準備ヲ進承セシメ且所在航空部隊ノ援助」を
命じた。

第二十八師団は在満当時歩兵司令部(團長は少將で歩兵三〇聯隊を
指揮して戦斗にあたる)を持っていたが、歩兵第三十六聯隊が離下から
離れたため、歩兵司令部は軍令によって除かれたと、陸路參謀は戦後
述べている。

(註) 師団の固有編成は昭和十二年頃迄は一般に歩兵四個聯隊(二個
旅団)を基幹に輜重、搜索(騎兵)、砲兵(山砲の場合は駄馬、野砲
は車輛編成)工兵などの特科部隊を加え、兵員数およそ二万名(戦時
編成)となっていたが、十三年頃戦局の拡大に伴って師団の数を増
やす必要が生じ、一般に歩兵三個聯隊を基幹に特科部隊を加え、兵員も
一万五千名から一万八千名を基準とするように改められたが、沖繩戦
で玉碎した第六十二師団のように独立歩兵八個大隊(二個混成旅団)
を基幹とする警備師団も若干存在した。

又満州、支那大陸、ビルマのような広大な戦場に使用された師団には
通常、師団司令部の下に歩兵司令部と云う指揮機関が設かれ、歩兵団
長(少將)が歩兵三個聯隊を指揮して戦斗にあたり、サイパン、硫
黄島、沖繩のような島しよでの作戦に使用された師団には歩兵團長は置
かれず、師団長が戦斗を指揮した。これは島しよでの戦斗が陣中中心
になり、機動の余力が少ないので、歩兵團長のような指揮段階を余り必
要としないのによるものと推定される。

なお第二十八師団は山砲師団で野砲編成の師団に比べて火力は劣るが
大陸の戦場に適用するよう機動力を重視され、当時としては数少ない騎兵
聯隊を有していたが、同師団が島しよの守備に向けられたため、馬匹の
大部分を原駐地に残置、歩兵のみを裝備に改編された。山砲は推馬編成
なので、地形の不利な山岳地帯や離地に適用するのは長所だが、破壊力に

派し、且セメントの急送を要する。

七月八日沖繩派遣中の長少將は第三十二軍參謀長に補職された。同少
將は十一日上海して大本営に状況報告を行なった。この際參謀長に対
して南西諸島防衛のため、最小限六〇師団と一〇連隊を必要とすること
と、作井隊及び糧秣の必要性、非戦斗員の台湾疎開、貨物廠の設置など
について意見を述べた。

同少將は參謀長補職後数回宮古島を訪れ、作戦準備の視察指導を行な
った。二十年三月中将に進級、六月二十三日牛島軍司令官と共に自決、
沖繩で骨を埋めた。

(5) 歩三、騎二十八連隊の海上輸送

第二十八師団の宮古島転用について元騎兵第二十八聯隊長、上田巖大
佐、元歩兵第三聯隊長怡土軍大佐は当時を回顧して要旨次の記を寄せ
ている。

(上田元大佐の手記) 騎兵第二十八聯隊は昭和十九年七月上旬、廿八
師団の宮古島転用にもなつて、満州ワラルギを出発、途中裝備変更の
ため軍馬五百頭を原駐地へ返し、朝鮮釜山に集結した。七月二十二日
重兵第廿八聯隊(横山伊一郎大佐)と共に八千トン級の輸送船に乗船、
横山大佐の輸送指揮で釜山を出発、同日門司に着いた。門司港で六千ト
ン級の輸送船に乗り替へよとの命令で一昼夜で不眠不休の積み替え作
業を実施、二十五日門司港を解纜。敵潜水艦の攻撃を考慮し一昼間だけの
航行で二泊三日を要して鹿児島湾に集結した。船内は三段装置の櫓に坪
当り十二・三名の割合で詰めこまれた兵員はろくに膝を伸ばすことも
できない程の窮屈さ。しかも騒音の候として船内は蒸風呂のような暑熱で
兵員の苦痛思いなかに過ぎるものがあった。

全將兵一日も早く宮古島に上陸して守備の任に就きたいと焦るが、老
朽船のうえに使用過度で機関整備の余裕なきため、鹿児島港より船内を
編成して出港したるも種子島までの途中に於て機関故障のため、二度も

鹿兒島に引き返し、およそ一ヶ月近く足止めの止むなきに至った。かくては任地者を待たずして兵員の損耗を来たす虞れあり、交渉の結果一泊二日の半数交替にて西桜島に上陸を許し、民家に休養せしめた。

八月十七日、第三回目に船団を編成してようやく鹿兒島港を出発、途中、懸念された敵潜水艦の攻撃を受けることなく、二十日一時鹿児島に退避、第九師団を乗せた三隊の大船団が那覇港に向うのを遠望、互いに武運長久を祈願、二十日待望の宮古島に上陸することができた。上陸後早速女学校の師団司令部を訪れ、横山伊一郎大佐と共に到着を申告、樺浦師団長より防衛方針、兵力配備の概要、敵の企図判断など指示を受け、廿八聯隊の任務を附与された。

(元歩兵第三聯隊長怡士大佐の手記) 連隊は南方転用の命を受け、ソ満国境の警備を他部隊に移譲して出発した。上海乗船後、先行不明、満州を南下中、急に釜山集結に変更しておよそ一週間船便を待たず門司へ向った。出発に当り、電波探知機の装備なきため、肉眼にて敵潜水艦を監視せよとの指示を受け、内心びびりした。関釜間でさえも敵潜水艦が出没するようでは戦局は容易ならざる段階まで至っている。これは只事ではないと感したが、聯隊長(怡士大佐)は師団でも唯一人の功三級授受者の歴戦者であるので、聊かの不安の色をみせたものでは部下に及ぼす影響少からざると思いを致し、努めて平静を装った。幸い途中で敵港の襲撃を受けることがなく、全員無事宮古島に到着、南地区の守備に任じた。山砲兵第二十八聯隊長大佐は陸士同期で平素から昵懇の間柄だったので、協同作戦準備もスムーズに運び、万事好都合だった。

一部は軍艦で急派
大本営では宮古島の護りを急ぎ強化するため派遣部隊の一部を軍艦で輸送した。すなわち山砲第二十八聯隊主力は七月二十日巡洋艦「鹿島」で釜山発、八月十二日宮古島着、又歩兵第三十連隊主力も巡洋艦で七月二十五日到着している。

(6) 先島守備隊を改編強化

第二十八師団の宮古群島配備に伴って先島守備隊(宮崎旅団長指揮)は先島集団(固有の編成ではなく、戦斗が易いように各部隊を組み合わせた軍隊区分、規模は師団と軍の間くらい)にあたる。小笠原地区集団、マリアナ地区集団もその例)と改称、宮崎少将麾下の独立混成第四十五旅団(独立歩兵七個大隊編成だが、二個大隊は第九師団の台湾転用に伴う兵力不足を補うため第三十二軍司令部の直轄に入れられ沖繩戦に参加、玉砕した)は八重山群島守備を命ぜられ、宮崎旅団長は八月二十二日石垣島へ出発した。

石垣島には宮田金吾少佐の率いる独立大隊が先遣され、警備に任じ、外に海軍警備隊が配備せられていた。同旅団は海没後編成され、兵員の四割を現地及び沖繩、宮古から召集、補充して九月編成を完了、与那国島を含む八重山群島全域に兵力を展開して米軍の進攻に備えた。

(註) 旅団長宮崎武之少将は熊本県出身、陸士二十六年、大正三年歩兵少尉任官、天津駐屯歩兵第二聯隊長、豊橋陸軍教導学校長、豊橋予備士官学校長などを歴補、資性濃厚、人格高潔、部下の信望厚く、戦後無事復員して現在鎌倉市で余生を送っている。

第三十二軍関係の陸軍将官としては唯一人の現存者
大本営では第二十八師団の宮古島転用命令に引きつづき七月二十四日独立混成第五十九旅団(多賀哲四郎少将)同じく第六十旅団(安藤忠一郎少将)を第三十二軍に編入、現地軍の意見をも参酌して宮古島に配備することとされた。両旅団は満州で八月中旬頃迄に編成を終わり、釜山から海路輸送され、九月下旬頃宮古島に上陸している。この外各種の配属部隊が相次いで先島集団長の指揮下に入れられ、十二月頃迄に所定の兵力が展開を終った。最終的には宮古群島所在部隊の総兵力は多くの配属部隊を合わせ陸軍のみでおよそ二万八千名、海軍部隊を合わせれば三万名を算える強大なものとなった。昭和十九年十月頃の各兵団司令

部の幹部陣容は次の通りである。

第二十八師団

- 師団長 中将 樺浦 健一 (24)
 - 二十年一月以降 少将 納見 敏郎 (27)
 - 参謀長 少将 福地 春男 (32)
 - 二十年二月以降 大佐 一瀬 寿 (32)
 - 参謀(後方) 中佐 陸路富士雄 (38)
 - 参謀(作戦) 少佐 杉本 和朗 (42)
 - (二十年三月中任連級)
 - 高級副官 中佐 浜 久 (39)
 - 次級副官 少佐 清野 清智 (特11)
 - 兵器部長 大佐 幸田 祥造 (26)
 - 高級部長 少佐 上田 幸吉
 - 經理部長 主大佐 三浦 富一
 - 高級部長 主少佐 角田 醇平
 - 軍医部長 医大佐 脇田 豊
 - 高級部長 医少佐 打田 直
 - 獣医部長 獣中佐 走尾 直
 - 十九年十二月以降獣大尉 富田 輝也 (特12)
- 九月独立混成59、60旅が増加兵団として、配備された。
- ### 独立混成第五十九旅団(驍)
- 旅団長 少将 多賀哲四郎 (26)
 - 高級部長 中佐 蔵 伊寿郎 (27)
 - 副官 大尉 小梨 貞三
 - 軍医 少佐 塚本 泉
 - 主計 大尉 石岡 秋保

(7) 独立混成59、60両旅を増加配備

独立混成第六十旅団(駒)

- 旅団長 少将 安藤忠一郎 (21)
 - 高級部長 中佐 甲木 恭一 (39)
 - 副官 大尉 富宿 隆
 - 兵器 少佐 松崎 公
 - 主計 大尉 松尾源次郎
 - 軍医 医大尉 西堀 東治
 - 獣医 獣中尉 佐々木博一
- (註) 60旅団は十九年八月九日満州牡丹江で編成、装備は59旅とほぼ同じ。
なおこの旅団は八月下旬から九月始めにかけてそれぞれ釜山を出発同月中旬頃宮古島に上陸している。
(多賀少将主要軍歴) 広島県出身、明治二十六年生、大正四年歩兵少尉任官、昭和二年陸大卒、朝鮮鎮海海軍要務、近衛師団、第十四師団各参謀、十四師団参謀長を経て昭和十七年少将、独立混成第十七旅団、同五十九旅団長、昭和三十年十二月二十七日病氣他界、宮古島では二十年五月迄伊良部島、六月以降は平良町(北地区)の守備を担任した陸士二十六年期
(安藤少将主要軍歴) 秋田県出身、明治二十年十一月生、明治四十二年歩兵少尉、台湾歩兵第二聯隊付(台南高工配属将校) 関東軍司令部付、熊本聯隊司令部を経て昭和十六年少将、十九年独立混成第六十旅団長、宮古島では東地区(城辺町)の守備を担任した。陸士二十一年期、復員後二十九年十一月他界した。

海軍警備隊

海軍警備隊は昭和十九年九月迄は沖繩海軍根拠地隊宮古派遣隊と称していたが、同月五日宮古島海軍警備隊に改称、沖繩根拠地隊司令官の指揮を受けていたが、二十年五月高雄警備府司令官の指揮下に入った。警備隊主力の宮古島到着状況は明かでないが、八月末から九月にかけて呉を出港、輸送船日輪丸、第一日丸等によって宮古島に輸送されている。

海軍警備隊の編成及び主要指揮官名は次の通りで、主な任務は海軍飛行場の防衛と対空戦、海軍砲台は敵上陸軍の撃退にあった。指揮系統は陸海軍別々だが、陸上戦斗（敵上陸）に入った場合は陸軍指揮官（先島集團長）の指揮下に入ることになっていた。

警備隊本部は始め宮古中学校各舎に設けられていたが、二月以降は海軍飛行場北側の高地に移った。

宮古島海軍警備隊

- 司令 村尾重二大佐
- 副官 大尉 岩井
- 主計長 主大尉 三辺 佑介(?)
- 軍医長 医少佐 曾我 立巳
- 副官 中尉 新田 松雄
- 富田隊(十四サンチ高角砲二門) 中尉 富田梅太郎
- 瀬野隊(十二サンチ高角砲二門) 中尉 瀬野 卓也
- 湊隊(二十五ミリ機銃四門) 中尉 湊 要吉
- 斎藤隊(二十五ミリ機銃四門) 中尉 斎藤 明

平良港機銃陣地
入谷隊(二年式十四サンチ砲二門)

少尉 入谷 勇三

第三二三砲隊 技術少佐 吉丸 藤吉

水上警備隊(特攻魚雷艇)

江口隊(三年式十四サンチ砲二門)

兵曹長 江口善太郎

この外本部に十三ミリ、二十五ミリ機銃各二門を装備、水警隊、入谷隊を除き全部が防空部隊だった。

総兵力は終戦時の記録では一、七、一四名となっているが、これは近海で撃沈された艦船の乗組員の復入隊者や佐世保海軍工廠宮古島派遣隊、沖繩根拠地隊から連絡又は戦半指揮に來て帰れなくなった将兵若干名は含まれていないと思われる。

松尾大佐は十九年十二月付で館山砲術学校教頭より宮古島海軍警備隊司令に転じた。

(8) 軍首脳の往来踵を接す

八月に入り廿八師団主力、配属部隊の到着展開が進むに伴って宮古島防衛のため作戦準備は本格的となり、軍首脳の往来も次の如く頻繁をさめた。

八月十五日 福地参謀長、台北で開かれた第十方面取懸、指揮下兵團参謀長会議へ出席。

二十九日 福地参謀長、兵團代理として兵團長会議出席のため、首里の卅二軍司令部に参集。

九月四日 卅二軍参謀長、はせ山参謀宮古島飛行場視察。

十七日 卅二軍司令官牛島中将、高級参謀八原博道大佐、情報主任栗丸兼数少佐を帯同來島、廿八師団麾下の各部隊を初巡視察。

二十六日 軍通信参謀三宅少佐來島、宮古島部隊の通信視察。

二十九日 卅二軍司令官牛島中将來島、師団長より状況報告を聴取。陣地の一部及び中飛行場を視察、沖繩へ、天皇、皇后両陛下には師団長に目録の品を、将兵にタバコ、入院患者に御菓子を下賜された。

二十日 福地参謀長、在八重山独逸第四十五旅団(宮崎少将)兵棋演習のため石垣へ(第三十二軍八原高級参謀、はせ山参謀参加)

十六日 侍従武官坪島文雄中将來島、師団長より状況報告を聴取。陣地の一部及び中飛行場を視察、沖繩へ、天皇、皇后両陛下には師団長に目録の品を、将兵にタバコ、入院患者に御菓子を下賜された。

二十日 福地参謀長、在八重山独逸第四十五旅団(宮崎少将)兵棋演習のため石垣へ(第三十二軍八原高級参謀、はせ山参謀参加)

第二章 敵の企図判断と作戦準備

(1) 六航軍、先島方面来攻を予測

南西諸島に対する敵の企図判断については時期的に、又大本營、第十方面軍、現地軍、航空軍などの間に多少の相違が見られるが、昭和十九年初頭以降は大体次のようであった。

一、昭和十九年五月頃における第三十二軍の状況判断
ロ、マリアナの線と同時に南西諸島に進攻する。
ハ、マリアナ奪取後十分準備を整えて二段攻撃式に南西諸島を攻略する。

ハ、依然島伝い戦法を採用、ニューギニヤ、比島、台湾を経由、あるいは一部を省略、南西諸島へ進攻する。
このうちではハの公算が大きく、その時期は二十年春頃になるものと

十一月二十五日 卅二軍参謀長栗丸参謀來島視察。

十二月五日 長参謀長、栗丸参謀台北出張の途次連絡のため來島。

十一月 福地参謀長、在石垣島部隊の教育及び陣地視察(杉本参謀、堀江副官随行)

十一月 軍航空参謀金井中佐來島。

十一月 長参謀長、栗丸参謀來島、二十二、三の二日間女学校の司令部に於て宮古島防衛の図上研究のための兵棋演習実施。

(注) この兵棋演習とは彼等の態勢を想定した図面に基いて部隊記号を附したコマを動かして作戦計画を研究討議する演習で一般には大隊長以上が参加する)

予想していたが、(ロ)の場合も全然公算が絶無とは云えない。更に以上何れの場合でも米軍の戦力から推して大東島のような小島に足掛がかりを求めようとする事はせず、南西諸島の大根拠地たるべき沖繩本島、或は宮古島に直接来攻する事が考えられた。

これにつき第三十二軍高級参謀八原大佐は戦後の回想で「現地軍では初めから敵の主攻が沖繩本島に向けられるだろうという見通しをもって、したが、反面宮古島も油断が出来ないと考えられた。」と述べているが、諸般の情勢から推して先ず沖繩本島にやってくることはほぼ間違いないとしても、状況によっては宮古島が先になるとする可能性もある得るというのが当時現地軍間のほぼ一致した判断とされていた。

然し昭和二十年に入って敵の空襲が専ら沖繩本島に向けられつつあることや、執拗な偵察行動などから判断して次期進攻目標が沖繩本島に向けられることは九分通り間違いないとの見方が決定的となり、従って宮

古島の危険率はかなり薄らいだと見られた。
昭和二十年三月中旬頃に於ける大本營などの敵判断は次の通りで、敵の次期進攻目標について決定的な判断を下していないが、二十日頃になって陸海兩統帥部共次期米攻は沖繩本島方面に四月初頭行なわれるであろうと云う点で一致している。

然しその反面二十四日から開始された沖繩群島に対する艦砲射撃について米機動部隊が九州空襲に際し日本航空隊のため、大きな損害を蒙ったので南方へ撤退する途中、肚いせにやっていたものと軽く考え、米軍が沖繩攻略のため本格的に押し寄せるのは未だあとのことだろうと多寡をくくっていたと云うのだから情勢判断の甘さが指摘される。

一 第十方面軍(在台北、軍司令官安藤利吉大將)

敵の次期進攻は依然四月上旬頃であるが、その方向については不明である。即ち沖繩方面は他の台湾、宮古群島と比較して特に敵の進攻意向が濃化したと判断される資料がないからである。

二 大本營

(1) 硫黄島作戦後の米軍の次期作戦方面は南西諸島中、沖繩本島或は状況により台湾方面であって、使用兵力は当初三個師内外、爾後六個師内外、作戦時期は三月下旬乃至四月上旬頃と判断される。

(2) 米本土からハワイを経てレイテ及びマリアナ方面に対する敵輸送船団の動きは硫黄島作戦後も引き続き活発であって、三月上旬に於て従来の最高潮に達している。又二十年に入ってから敵潜水艦の南西諸島方面出現の増加、B 24の南大東島及び沖繩付近における三回の偵察ならびに三月中旬からマリアナ及びレイテからする哨戒機の南西諸島方面への増加等は一般戦關係と相俟って米軍次期作戦の指向方面は南西諸島方面の算大なることを示し、状況により台湾に先ず上陸することがあると判断される。又南西諸島に於てはその師団に鑑み、沖繩

本島に上陸する場合が多いと考えられる。

三 陸軍第六航空軍(在福岡、軍司令官菅原道大中將)

六航空軍は大本營の判断に基いて敵は概ね四月上旬南西諸島に上陸して来るであろうことを予想していた。三月中旬六航空軍に於て実施した兵棋演習の研究結果による細部の判断は次の通りであった。

(1) 敵の攻略船団はレイテ及びマリアナ方面から行動を起こし、台湾東方海面を経て沖繩島東方面に近接し、主力を以て沖繩本島南西部方面に進入し、北、中飛行場方面から上陸すると共に南部(深川)方面に一部の上陸を行なうのであろう。

(2) 上陸は先ず機動部隊による爆撃及び上陸二三日前から熾烈な艦砲射撃が行なわれるのであろう。

(3) 敵は事前に沖繩本島両側の制圧を行なうべく従って徳之島及び九州方面は機動部隊による反復空襲を蒙ることか予想されるが徳之島に当初から一部の上陸を見ることはないであろう。これに反し宮古島、石垣島は良好な飛行場を有するので、状況により当初から敵の上陸を見ることもある。

(2) 陣地戦を想定、火力配備

大本營では宮古島の陸上戦斗は主として陣地戦になることを考えていたので、特に強力な敵水部隊は配置しなかったが、水際戦斗に備え戦車一個中隊を派遣した。この戦車部隊は戦車第二十七聯隊の第三中隊で主力は沖繩に送られ、沖繩戦に参加した。同聯隊は東満の勃利で対ソ戦に備えて猛訓練に励んでいたが、戦況の急変により沖繩へ送られたもので、第三中隊の装備は九五式中戦車(十三ト、五十七ミリ砲一門、機関銃三)十台と九五式輕戦車(重五ト、三十七ミリ砲一門と機関銃一)一台から成り、本部を城辺

村長間に置き、敵上陸に備えていた。飛行場復旧作業にはフルトラー代りに使用され、威力を発揮したが、本来の目的に副わない戦車使用方法が中隊長以下に歓迎されなかったと云われる。次に宮古島に配備された火砲は野戦重砲兵第一聯隊第一大隊の十五センチ榴弾砲を筆頭に大体次のようであった。

- △海軍砲台
 - 二十五種加農砲二門(平良町南岸)
 - 十五種榴弾砲二門(海軍飛行場東高地)
 - 十四種加農砲二門(城辺町友利南岸)
 - 十四種加農砲一門(平良町ヒノ高地)
 - 一門(城辺町与那浜崎)
 - 十二種榴弾砲二門(平良町干瀬尾神崎)
 - (註・配置個所は一部明確欠く)
- これらの海軍砲台は平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦船を撃破する目的を以て配備された。

△野戦重砲

- 十五センチ榴弾砲三門(第一中隊) 伊良部村長山高地(平良港に上陸する敵を背後から攻撃する)
- 十五センチ榴弾砲一門(第一中隊所屬) 平良町南岸
- 十五センチ榴弾砲四門(第二中隊) 野原越東方ウストラ嶺
- 十五センチ榴弾砲四門(第三中隊) 城辺村ザラッキ高地
- これらの重砲は海上及び中飛行場、野原岳主陣地一帯を防衛し得るが如く配置された。
- △山砲兵第二十八聯隊
- 九四式山砲二十四門、九九式十センチ榴弾砲十二門
- △歩兵第三聯隊、同三十聯隊
- 九二式七センチ歩兵砲十二門、四一式聯隊砲十二門、三十七ミリ連射砲十二門、
- △特設迫撃砲隊 十二門

- △独立連射砲第五大隊 一式機動四十七ミリ連射砲十八門
- △独立混成第五十九、六十旅団歩兵大隊
- 四一式山砲十六門、九四式三十七ミリ連射砲三十二門
- 旅団砲兵 迫撃砲三十六門

以上が主なもの、この外海軍飛行場付近に十二センチ、十四センチ高角砲各二門が配置された。これらの火砲部隊は聯隊編成内の歩兵砲隊などを除き山砲第二十八聯隊長大佐の統一指揮下に置かれ、海軍砲台を除き、各地区に重点的に配置された。高角砲は敵上陸後は水平射撃で地上戦斗に協力することになっていたが、一番の悩みは敵のM1、M4などの大型戦車に対する防禦法で硫黄島、サイパンの戦訓などから三十七ミリ連射砲では歯が立たないことが明らかとなり、大口徑砲で対抗せねばならないが、大口徑砲は動きの早い戦車攻撃に不便、移動、陣地転換、発射速度、秘匿などの点で、を伴ない、陣地の選定築造、訓練に苦勞を必要とし、このため歩兵による急造爆撃戦術も重要視された。

(3) 野重第一大隊の輸送

(野重第一聯隊第一大隊長高矢三郎少佐の手記) 野戦重砲第一聯隊は太平洋戦争初期ヒッピン作戦に従事した。昭和十七年七月以降瀋陽州国黒河省神武屯に於て國境警備ならびに教育訓練に勤んでいたが十九年六月下旬出動下令、鉄道により奉天經由、釜山に到着した。行先地については一切知らされなかったが、のちになってサイパン逆上陸作戦に使用されることになっていくことを知られた。釜山に数日間滞在中、大本營の方針変更により南西諸島防衛に充てられることになり、第九師団の將兵と同船で門司、鹿兒島に寄港した。その後那覇に至り、第三十二軍司令官の指揮下に入った。その後船便で戦車中隊、獨立工兵隊(上陸用舟艇部隊)と共に宮古島に送られ、第二十八師団長の指揮下に入った。時期は七月下旬又は八月下旬。宮古島に於ては始め城辺國民学校に宿営、民間人の協力を得て洞窟陣

地の構築作業を中心に作戦準備を進めたが、爆薬・コンクリートなどの資材乏しく、苦勞を極めた。

同年十月第一中隊（門欠）を伊良部島に派遣、混成旅団長の指揮下に入らした。任務は同島の防衛及び平良港方面に上陸を企図する敵を背後から攻撃するのが主であった。

大隊主力は山砲兵第二十八連隊長腕火佐の指揮下に入った。大隊の装備は十五センチ榴弾砲十二門（三個中隊、四門づつ）で保有弾薬は釜山に於て六千発補給を受け、合計一万発余りだった。大隊の主要幹部将校は次の通り。

- 大隊長 少佐 高矢三郎
- 副官 中尉 片岡明
- 指揮班長 中尉 姫野寛一
- 第一中隊長 大尉 三上
- 第二中隊長 中尉 杉江
- 第三中隊長 大尉 川戸廉介
- 段列中隊長 欠
- 人員総計 七百名

(4) 衛生部隊の臨戦準備

衛生関係部隊の配備及び行動、臨戦準備の概要は次の通りである。

- 師団軍医部
 - 部長 医大佐 藤田豊
 - 医少佐 打田直
 - 医少佐 山田豊
 - 医大尉 三留千早
- 昭和二十年三月以降は平良第一国民学校校舎内に位置、二月中旬以降は野原砲隊司令部へ移動
- 宮古島陸軍病院 医少佐 恒松陽之助
- 鏡原国民学校に位置 一部を以て特設分院

(ロ) 栄養失調対策

二十年三月以降補給は全く絶え、手持ちの糧秣だけで全將兵をまかなわねばならなくなった。而もあと何年間持久すればよいか、見通しつかない。糧力節約につとめ、食ひ延ばしを図った。同時に現地自給に力を入れ、鳥類虫類は勿論野草に至る迄食ひ得るものを調査し、活用せしめたが、不十分免れず已むなく軍馬肉を定期的に給する方途を講じた。主食は保有の米をなるべく消費しないように努め、手取り早く増収を望める甘藷を代用食に充て大豆を以て蛋白質源、食塩は海水（小規模な塩田があった）より細々乍ら自給するようつとめた。漁獲物を得るため漁撈班を組織して魚類の入手につとめたが、昼間は敵機の妨害に遭い所期の効果をあげることが出来なかった。このため大豆の栽培に力を入れ台湾から熱地に適する白子豆の種子を急ぎ飛行機で取り寄せるなどして糧力増進に努めた。又豚、山羊、鶏などは一定数増える迄は手をつけないようして増産維持をはかったが、劣悪な給食と過重な陣地構築作業、訓練などで將兵の体力低下は目に見えて増え、健康維持は至難の状態だった。

(イ) 衛生材料の補給

補給は全く望めないため手持ち材料を有効に活用すると共に草根、木皮等を原料として種々薬品を製造、使用した。

(ニ) 給水対策

宮古島には井戸が少なく飲料水確保に苦勞した。これがため野戦作井隊による作井を試みたが、地質の関係で成功しなかった。このため雨水を利用する外各地区の湧水を防疫給水部の手でろ過して飲料水に供した。外野原越の湧水については貯水池を造って有事に備えた。

第二十八師団第一野戦病院

医大尉 和田謙作

第二十八師団第四野戦病院

城辺村花切に位置、二十年五月四日平良町盛加に移動

医大尉 辻 義春 城辺町福里に位置

防疫給水部 医少佐 大村達雄

平良町細竹、一部を各地区に配置

第二野戦病院 医大尉 三好悦二

伊良部島、一部を大東島

(注) 第三野戦病院は石垣島へ派遣

△軍陣医療業務

師団は戦況急変のため、準備不十分のまま宮古島に駆進、更にその後補給意に委せず、医薬品、衛生材料にこと欠き、特にマラリア防退に必要な塩類、硫酸、アセリン、殺虫剤などの不足著しく、風土病の予防対策は困難を極め、衛生状態の悪化は避けられなかった。

(イ) マラリア対策

三万名に近い將兵の進駐で食糧、住居などに不自由を來し、マラリアなど風土病の蔓延と栄養失調患者の続出で体力の疲弊消耗著しく、戦力の低下は憂慮すべきものであった。

このため師団衛生部ではマラリア防退対策に重点を置き、台北帝大熱帯医学研究所の宮原、大森兩教授を招へいで五日間にわたって全軍医の教育を実施したのを手始め、蚊の発生源を塞ぐ目的で全島にわたって水流溝渠の整備、水田、荒田、池などの理立て、雑草雑木の伐採、兵舎内外の清潔清頓、予防内服の徹底をはかると共に原虫保持者の早期発見、区分を迅速確実ならしめるため、布施中尉を長とする専門工作班を編成、台湾軍から派遣されたけん文虫ら六名の技術者を配し、軍民の原虫検査を徹底的に実施して予防につとめた。

(ロ) 戦斗開始に伴う戦傷者収療計画

(註) 宮古島に於ては敵の第一波攻撃に於て数千名の死傷者を生ずることを予測して対策が樹られたが、民間人はこの計画には含まれていないと解される。

方針

傷者収療の重点を迅速確実なる患者収容に指向し、師団戦斗の進展に支障を及ぼさず共に初療の普及及び並に完成に遺憾なきを期して極力長期的人的戦力の維持を図らしむ。

指導要領

(1) 部署

全員戦斗配置に就く時期を以て衛生部員、特設患者収容隊（衛生隊）を欠く隊に於て編成したるものと共に配置に就く。

(別隊付衛生部員（略）)

(特設患者収容隊)

平良町更竹付近に位置し戦斗開始と共に傷者発生状況に即応し各小地区を分担せしむ、之が部署は最小限分隊単位とす。

(2) 収療施設

イ、傷者溜場は各陣地休息掩蔽部に設置し、予じめ温存材料を準備す。

ロ、収療拠点は各地区毎に数ヶ所設け何れも地形地物を利用すると共に地下施設を構築す。

ハ、糞槽等は各大隊毎に設くるも状況により隣接大隊或は他隊の衛生部員と協同して開設す。

ニ、第一野病は細竹、盛加の中間付近に洞窟病院を施設し主として北地区、東地区の傷者を収療す。状況之を許せば野病よりの傷者

を収療す。

ホ、第四野病第一半部は更竹付近に洞窟病院を施設し主として南地区、中地区及び東地区の傷者を収療す。

ヘ、陸病は増原西方六三高地付近に洞窟病院を施設し、主として北地区、南地区の傷者を収療す。状況之を許せば野病よりの傷者を収療す。

ト、陸病狩猟分室は本院に合す。

チ、野病、陸病の移動時期は甲戦備発令直後とす。

リ、各衛生機関共に対空対策(偽装等)対ガス対策(隔離設置等)の考慮をなしておくを要す。

ス、第四野病第二半部は更竹司令部付近に位置し予備とす。傷者収出するに至れば一部を以て挺進し初療普及に勉むるも機を見て更竹付近迄後退し第一半部と共に南、中、東地区の傷者を収療す。ル、第四野病、陸病を含む地域を傷者集とし大体この地域に傷者を集結す。

(3) 収容更送 (4) 輸送の強化 (5) 治療(以下略)

(一) (ハンセン氏病対策(略))

(註)この部分は元第二十八師団軍医部長藤田軍医大佐の手記を基として記述した。

(5) 水上特攻船隊の配備

戦争末期の日本軍が開発した新兵器の一つに水上特攻艦があげられるこれは敵が上陸してきそうな沿岸に配備、夜間を利用して主として輸送船に体当たり攻撃を加えようとするもので、木造合板(ベニヤ板)金長およそ五メートル、排水量一四トン、乗員一名、艦首に二五〇キロの炸薬を装備、二十三ノットの快速度を出せ、小型で軽快に行動できるような設計されている。戦斗開始前は海岸の秘匿場所に格納、出撃の時は人力

(6) 航空部隊の展開

大本営では敵が南西諸島に進攻した場合に所在の地上軍と相呼応して台湾及び九州に航空兵力を結集して大々的な特攻攻撃を加え、敵艦船を海上で撃滅する方針を樹ていたが、一部を沖縄各基地にハリつけ、至近距離からの特攻を準備した。

海軍は棚田大佐麾下の南西諸島航空隊の一部が宮古、石垣島に派遣され、陸軍は在台湾第八飛行師団麾下の第九飛行団(柳本栄大佐、二十年二月比島から台湾へ移動、同月下旬石垣島に戦斗司令部開設)に属する特攻隊が宮古島の各基地に次の如く展開した。

第二十四飛行戦隊(戦斗機十機)
独立飛行第四十一中隊(偵察機十機)

誠第一一五飛行隊(特攻機十機)
〃一六〃
この外誠第三十九、同四十飛行隊(特攻機合計二十機)が宮古島に配置されることになっていたが、実施されなかった。

これらの特攻機は沖縄戦に出勤参加したか、飛行場の掩体施設が十分で且強力な防空隊(陸軍高射砲隊などの配置がなかった)を持たなかったため、地上で撃破されたりして所期の特攻戦果は取られなかったようである。

第三章 防衛方針を水際作戦に

(1) 攻めるに易い宮古島

十九年秋に入らば敵潜水艦の出発頻り、又敵機動部隊近接の情報相次ぎ戦場化に至るの状況となってきた。集団では敵来攻に備えて陣地構築、飛行場の整備、対敵訓練、武器弾薬、軍需資材の集積などに全力を傾注軍官民をあげての防衛態勢の完備が期せられた。

孤島の防衛についてはサイパン戦の戦訓などから推して友軍海空軍の全面的協力は期待出来ず、制海制空権を奪われた戦いでは兵力の増援補給は考えられないので、戦術持久戦法は可能性がうすく、再度にわたる兵棋演習の結果、宮古島では持久戦法は採用せず、敵上陸時に於て水際に兵力を重点的に集中、一気にこれが殲滅を図る水際決戦方式がとられることになった。そして状況万止むを得ざる場合でも極力敵の飛行場利用を妨害すべく野原岳を中心とする主陣地被爆陣地に拠って持久出血戦法をはかるというのが宮古島防衛の骨子であった。

この作戰計画は主として福地参謀長が立案したと云われ、細部については「宮古島戦斗教令」が基本となっている。宮古島は地形的にみて東部は断崖が海岸に迫っているの上陸(戦車や器材の揚陸が困難)には不

で海上に運び出される仕組みで、この作業のため基地隊が配備されてい

た。宮古島に配備されたのは陸軍の海上挺進第四戦隊(マルレ型)海軍が濠洲型一戦隊、陸軍は金子昌功少佐(五十一期)が指揮して昭和二十年一月下旬鹿児島間列島の渡島敷島からおおよそ百隻が船団を組んで宮古島へ向かったが、途中悪天候に災いされてバラバラになり、一部は台湾へ漂着するという不首尾で、主力が宮古島に集結した頃は艦数は二十乃至三十隻に減じ、人員も六十名足らずだった。同大隊は基地大隊の協力を得て平良町下里俗称トリバー沿岸に秘匿線を張り、艇を格納して戦斗に備えた。平良港方面に敵が上陸を企図した場合、体当たり出撃の段取りだった。

一方海軍の濠洲型はおおよそ五十隻が城辺村友利海岸に配置され、下地村南岸に上陸する敵に備えていた。

この水上特攻艦が初めて使用されたのは米軍が比島リンガエン湾に上陸した時からだだが、船体が脆く、防禦力皆無、一発でも敵弾を受けると行動の自由を失うので、期待された戦果は上らなかった。沖縄戦では慶良間列島に相当数配備されたが、敵が機先を制して同列島に上陸したため、殆んど無為のまま全滅した。

向きとされ、これに反し南部は平坦な海岸線がつつき飛行場に近く、敵上陸の可能性が大きいと云うのが戦術上の常識とされた。

宮古島防衛上の地形的難点として

イ、島が狭小で四圍から艦砲射撃を受けるおそれが多い。

ロ、上陸可能地が多い。

ハ、島全体が平坦で敵上陸後その前進を阻止する地形上の障害が乏しい。

ニ、飛行場が上陸予想地点に近く防衛が難かしい。

などが挙げられ、反面これが敵にとって上陸後換るべき遮蔽物が少なく、日本軍の反撃に曝露される欠点ともされた。陸路参謀はこれにつき一番苦心したのは戦車の進攻を阻止する川やクリク、沼などが殆んどなかったことで、敵が上陸後大戦車団で一気に正面突破を強行してくると有効な防禦方法がなかったのではないかと述べている。

米軍の上陸予想地としては次の要素から平良港付近、下地村宮園一帯手列一帯、白川湾付近が考えられ、この方面の配備に重点が置かれた。

イ、海岸が平坦で上陸が比較的容易である。

ロ、上陸支援に適している(艦砲射撃のための行動が容易)

ハ、上陸後平坦地区を一気に島の中心部に殺到するのに適して居り、

資材の推進展開が容易である。

二、作戦目的（飛行場の奪取）の達成が容易である。このような宮古島の地形、守備部隊の兵力、陣地、武器弾薬などの保有量などを勘案して作られたのが宮古島防禦作戦大綱で最終的には十九年十二月二十二日、三日の両日司令部に於て第三十二軍長參謀長、菓丸參謀らを迎えて催された兵棋演習を経て定められた。これによれば島の最高峰野原岳に設けられた洞窟司令部を中心とした一連の複層陣地が最後の決戦場となる要素が強いが、若し敵が南海岸又は北海岸から上陸して一気に主陣地に殺到、野原岳主陣地がその手中に補した場合は、集団首脳はそこで玉碎するか、或は後退して後方に血路を開き、最後迄戦闘を指揮継続するか、ハッキリした方針があらかじめ打ち掛てられていたかどうか、明確な資料がないので、明かでないが、通信施設、予備陣地などの条件から考えて後述は事実上、難かしかつたのではないが、陸路參謀は戦後の回想で「宮古島防禦作戦」計画は主として福地參謀長の考えによるもので、詳しいことは記憶してないが、状況によっては野原岳放棄、戦闘継続と云うことも想定していたのではないが、然し建前としては野原岳決戦を含みであったように思う」と述べている。

(2) 北、南地区を重点防衛

一方針

有力ナル部隊ヲ以テ水際ヲ堅固ニ占領シ、努メテ水際ニ敵ヲ撃滅ス。其ノ重点ヲ北地区及南地区ニ指向ス。敵陸上ニ堅固タル地歩ヲ獲得セバ、戦闘警戒部隊（遊撃部隊）ノ果敢ナル戦闘ト主陣地ヨリスル挺身斬込戦闘ニヨリ敵戦力ヲ漸減シ、周到ニ準備セラレタル主陣地帯ニ誘致シ、敵ニ破滅的打撃ヲ与ヘテ破潰ス。状況止ムヲ得ザル場合ニ於テモ、復讐的陣地ニ拠リ、最後ノ一兵ニ至ル迄敢闘シ、敵ヲシテ飛行場ノ利用及ビ設定ヲ妨害ス。

二 戦闘指導要領

1、戦闘指導ハ「宮古島戦闘命令」、「宮古島各部隊戦闘任務」ニヨリ明確ニ規定シ、戦闘指導ノ根本トス（終戦時全部短知）

2、敵ノ上陸方面ニヨリ戦闘指導ノ概要

イ、平良港方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合北地区隊ノ東地区隊ノ水際戦闘部隊ノ一部ヲ増加シ、敵ノ水際ニ撃滅ス。水際戦闘主力ヲ以テ北正面陣地（陣地参照）ニ配備シ、敵ノ陣地帯内外ニ撃滅ス。コノ場合第六十旅団長ハ南地区隊ヲ併セ、指揮シ、海軍地区内陸軍陣地及南地区隊北方陣地ニ主力ヲ配備ス。

ロ、南地区隊方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合

南地区隊ニ北又ハ東地区隊ノ水際戦闘部隊ノ一部ヲ増加シ、主力砲兵ノ協同ヲ相俟ツテ水際ニ敵ヲ撃滅ス。

水際戦闘主力ヲ南方正面陣地ニ配備ス（斜向的陣地ヲ含ム）

コノ場合第五十九旅団長ハ主力ヲ以テ南地区隊ノ川満地点、其ノ東側及北側拠点ニ転移ス。

ハ、佐川根方面ヨリ上陸ヲ企図スル場合

北、中、東地区隊ハ協同シテ敵ヲ水際ニ撃滅ス。

此ノ方面ニ於テハ水際陣地ヲ以テ主陣地ノ前線トス。

敵上陸セル場合ニ於テハ北地区隊ハ6高地、72高地ヲ確保シテ

大野山林ノ錯雑地帯ニ敵ヲ撃滅ス。

中地区隊ハ佐川根、モテカ拠点ヲ確保シ、敵ノ南進ヲ妨害ス。

東地区隊ハ中地区隊ノ後援ヲナリ、一部ヲ中地区隊長ニ配備シ、野原中核ニ対スル敵ノ突進ヲ防遏ス。

各方面ヨリ一挙上陸ヲ企図スル場合

3、各地区隊毎ニ独立シテ地区防衛ヲ完遂ス

(3) 軍隊区分（二十年六月以降）

◆ 集団直轄部隊

第二十八師團制毒訓練所

少佐 那須 憲三

◆ 砲兵隊

長 山砲兵第二十八聯隊長

大佐 梶 松次郎

山砲兵第二十八聯隊

野戦重砲兵第一聯隊第一大隊

(第一中隊一小隊欠)

少佐 高矢 三郎

大尉 福島 郷一

特設迫撃砲隊(一小隊欠)

八センチ迫撃砲十二門

海軍砲台

十五センチ加農 二門

十四センチ加農 四門

十二センチ榴弾砲 二門

二十センチ榴弾砲 二門

◆ 工兵隊

長 工兵第二十八聯隊長

大佐 外賀 蒼一

工兵第二十八聯隊

要塞建築勤務第八中隊

第三十二軍野戦築城隊第四中隊

野戦作并第十六中隊

大尉 藤野清三郎

第二十八師團兵器修理所

大尉 藤本 武雄

病馬取扱所

獣大尉 保坂 斯道

防疫給水部

医少佐 大科 達雄

第二野戦病院

医大尉 三好 祝二

第三野戦病院(移)

医大尉 横井 忠男

第四野戦病院

医少佐 辻 義春

戦車第二十七聯隊第二中隊

大尉 渡辺 晃米

独立速射砲第五大隊(中隊欠)

少佐 西本 哲郎

海上挺進第四戦隊

少佐 金子 昌功

海上挺進基地第四大隊(一中隊欠)

大尉 西江 重樹

特設機関砲第四十七中隊

大尉 瀬見 修三

第三十二野戦物廠先島支廠

少佐 木村

第二移動兵器修理隊

大尉 堀江 輝雄

宮古島陸軍病院

医少佐 恒松陽之助

第二百五飛行場大隊

少佐 吉岡軍一郎

◇通信隊

長 第二十八師団通信隊長

少佐 國武 達雄

第二十八師団通信隊

電信第三十六聯隊第四中隊ノ一小隊

独立第四警戒隊

◇輜重隊

長 輜重兵第二十八聯隊長

少佐 宮川 正

輜重兵第二十八聯隊(一中隊欠)

陸上勤務第九中隊(一小隊欠)

特設水上勤務第一中隊(一小隊欠)

独立自動車第二百八十四中隊

中尉 仁木 寛行

中尉 吉川 民好

船舶工兵第二十三聯隊第一中隊(一小隊欠)

◇特設飛行場設定隊

長 第二十八師団司令部付

少佐 玉木 峯司

輜重兵第二十八聯隊第一中隊

第五百二十九野戦飛行場設定隊(海没遭難の残部)

第五百五特設整備工兵隊

中尉 下地 惠二

軍隊区分(その二)

◇東地区隊(城辺村一帯)

長 独立混成第六十旅団長

少将 安藤忠一郎

独立混成第六十旅団司令部

高級部員 中佐 甲木 啓一

独立歩兵第三百九十七大隊

少佐 田島勇三郎

” 第三百九十八大隊

少佐 黒田 流

” 第三百九十九大隊

少佐 新井 佑

” 第四百大隊

独立混成第六十旅団砲兵隊ノ一中隊

大尉 川村 尾張

独立混成第六十旅団通信隊

大尉 黒木 十三

独立歩兵第三百九十六大隊

大尉 牛尾 慎吾

独立機関銃第十八大隊第二中隊

大尉 竹内 隆

独立速射砲第五大隊第一中隊

野戦作并第九中隊 大尉 高橋 信雄

◇北地区隊(平良町一帯)

長 独立混成第五十九旅団長

少将 多賀哲四郎

独立混成第五十九旅団司令部

高級部員 中佐 飯 伊寿郎

独立歩兵第三百九十三大隊

少佐 福永 佑

” 第三百九十四大隊

大尉 武田 登

” 第三百九十五大隊

大尉 脇本 幸男

独立混成第五十九旅団砲兵隊

大尉 遠藤 修三

独立混成五十九旅団工兵隊

少佐 美馬 敬一

” 通信隊

大尉 清谷 州一

歩兵第三十聯隊

大尉 富沢 国松

独立速射砲第二十五中隊

海上挺進基地第四大隊ノ一中隊

山砲兵第二十八聯隊第五中隊

◇中地区隊(平良町北部)

長 騎兵第二十八聯隊長

大尉 上田 敏

騎兵第二十八聯隊

独立機関銃第十八大隊第三中隊

特設整備第二百九中隊

中尉 当間 林光

特設整備第二百十中隊

中尉 宮城 清昌

◇南地区隊(下地村一帯)

長 歩兵第三聯隊長

大尉 怡土 軍

歩兵第三聯隊

独立機関銃第十八大隊(二中隊欠)

少佐 斎藤 甚威

山砲兵第二十八聯隊第六中隊

海上挺進基地第三十八大隊

少佐 藤倉長太郎

野戦作并第八中隊

◇伊良部支隊

独立歩兵一〇大隊ニ若干ノ砲兵ヲ配ス

(本項、六十一頁付記参照)

第四章 初空襲の洗礼

(1) 敵機の独り舞台

昭和十九年十月十日晴れた。秋空の朝もやを衝いて不気味なサイレンの咆哮が宮古全島をふるわした。台湾東方海上を遊ぶ中ノアメリカ第卅八機動部隊による沖繩初空襲が行なわれたのである。第卅八機動部隊は正規空母十七、巡洋艦十四、駆逐艦五十八、計九十

四隻から成り、九百機の艦載機をよする強力部隊であった。この日延べ八百余機が沖繩、宮古、石垣島に空襲、那覇では軍民合わせて千余名を殺傷、住家建物一万余戸を焼き、全市をまたたく間に焼きと化さしめ、沖繩防衛の出鼻をくじいた。宮古には午前七時卅分から八時十五分にかけて延べ十六機のグラマンが来襲、主として飛行場及び渾水港沖に碇泊中の船舶に攻撃を加えた。

初めて見る敵機の不気味な姿と轟音、豆をいるような機銃の音、地軸を揺らす高射砲の炸裂音はたちまち平和な宮古島を阿修羅の巷と化し、島民は粗末な防空壕のなかで息をひそめて大空を我が物顔に乱舞する敵機を凝視した。友軍の地上砲火は一斉に火を吹き、防禦網をくり戻したが、敵機はゆうゆうとして飛行場と船舶に急降下爆撃を加え、間もなく引き揚げた。まさか宮古までが敵機に蹂躞されるようなことはあるまいと一種の望みをかけていた島民の期待は無惨にやぶれ、あらためて戦場化に至るの絶望感が支配的となった。第一回の空襲が止み、ホッとしたのも東の閨午後一時五分再びサイレンの音を追うようにして来襲した敵機は驚かす獲物を狙うが如く平良港内の広田丸に襲いかかり、必至に回避する同船に爆弾、機銃の雨を浴びせて撃沈、これを先途と撃ち上げる地上砲火を尻目に引き揚げた。

広田丸は榑木汽船所属の貨物船で、二、二一ト、三輪寛壽船長ら船員四十九名が乗り込み、シャムから米を満載して九月十七日バンコック発、キールン經由大阪へ向かう途中、平良港に寄港したところを不幸にして米空軍の攻撃を受けたものである。この目前後二回にわたる空襲で飛行場に待機中の友軍機九機が撃破され、さらに兵員十名が死傷、友軍の蒙った損害は少なかった。

後日譚だが、広田丸と共に海中に沈んだ米はその後一部分が引き揚げられたが、臭気がひどくて一般の食用に不適のため酒造用に供された。食糧不足の当時としては全くモッタイない話だ。

越えて十三日午後三時四十分から四時十分にかけて十五機が来襲、主として中学校東側の海軍兵舎、製糖会社などの建物に銃爆撃を加えた。この日友軍の地上砲火は有効な弾幕を張ってグラマン一機を撃ち落した。敵機は白煙をふいて久松西海岸に落下、塔乗員は落下傘で降下、捕虜となった。敵機の傍若無人の振舞いに歯がみをしていた軍民は撃墜第一号に快哉を叫び、友軍の機身を祝福した。

この捕虜は身柄を刑務支所の未決監に收容、師団情報科校による訊問が行なわれたのち、数日後に台湾へ移送されたが、携帯品は機橋際の大である。日本はすでに勝利の女神から完全に見放されていたのである。十、十空襲の直前補瀾師団長は那覇の県立女学校で開かれた卅二軍兵団長会同に出席するため九日堀江専署副官をともなうて那覇へ出張していた。この兵団長会同に出席した宮崎少将（右石垣島独逸四十五隊隊長）の回顧によると、この会同では敵来攻に備えて沖縄防衛の万全を期

第五章 敵来攻前に守将更迭

(1) 師団長、参謀長相次いで転出

二十一年一月に入るやレイテ決戦は絶望的狀態を来し、敵は九日あったに比島リンガエン湾に上陸、南西諸島をめぐる状態は日一日と緊迫の度を増してきた。十九年十月十日、十一日の空襲以来大がかりの空襲は杜絶していたが、大型機による偵察、海上補給路攻撃は頻りにつづき官民の不安と焦燥感は一層高まってきた。

このような状況に於て突如として先島群島防衛の最高責任者である集團長（第二十八師団長）についで参謀長の更迭が発令され、作戦準備がようやく軌道に乗りつつある表情に副われない人事だとして奇異の感を与えた。

即ち第二十八師団長補瀾一中将は一月十二日づけて在漢口第三十四軍司令官に、後任に台湾海軍兵隊司令官納見敏郎中将がそれぞれ親補、次で二月一日付で参謀長補地春男少将が香港占領地總督部参謀長兼南支派遣軍参謀副長に、後任には広島師団参謀一瀬寿中佐（着任後大佐進級）が補職発令された。

米転の補瀾中将は十六日朝九時専属副官堀江道徳大尉（福岡迄随行、

阪商船代理店（店主源河朝晋氏）の前に公開展示されて一般の敵愾心昂揚に供された。

しかしこの二日の空襲で友軍機の迎撃が全くなく、敵機の独り舞臺に終らしたと、及び那覇市が全滅したらしいとの噂が軍の通信関係部隊から洩れ、民心の動揺は掩いがたいものがあった。

大本営はいわゆる十、十空襲について翌十一日午後二時三十分のようによ発表した。「十月十日七時頃より十五時三十分の間、四次に亘り敵艦載機四百機は南西諸島、四方沖繩島、宮古島、奄美大島に來襲せり、所在の我が部隊はこれを迎撃、その二百六機以上を撃墜せり、我方の損害、地上及び船舶に若干の損害あり」

(2) 台湾沖航空戦

敵機の挑発するがままに隱忍自強、反撃の機を窺っていた日本空軍は十三日に至り、乾坤一擲の決戦を挑むべく立ち上がった。九州に展開を終った第一航空艦隊は鷹翼を連れて南下、その第一陣百数十機は十三日夕銀翼を輝かせて宮古島上空を通過、南方へ機影を没した。

久方ぶりで仰ぎみる友軍機の大編隊、鳥を掩いつくさんばかりの堂々たる陣翼陣に軍民こそぞて歓声を揚げて見送り、回天の偉業ここに成るかに見えた。この日敵機は空襲直後に友軍機の大編隊が現われたので、スワッ敵の大空襲と早合点、もはやこれまでと覚悟のホンをきめるといふ一掃もあつたようで、悲壯このうえもなかったが、友軍機とわかり、勇躍天に登るような心地がしたというのも無理からぬ話である。

かくて日本の運命をかけた台湾沖航空戦の火蓋が十三日から十六日にかけて台湾東方海上で繰り展げられ、三百数十機に上る日本空軍の精銳は敵機動部隊を強襲、大本営は敵艦五隻、空母十一隻、ほか合計二十数隻を撃沈したと鳴り物入りの大戦果を発表、國民を狂喜させたが、事實は何ぞはからん、わずかに巡洋艦など数隻を撃破したに止まり、これに對し我が方は航空機三百余機を一撃に喪失するという大敗北に終ったの

すための兵棋演習が催され、席上軍の方針が示された。日時は十月十一日頃だったらしい。兵団長会同終了後十三日台湾へ向かう友軍機の大編隊に続行、途中宮古飛行場へ一時着陸、燃料を補給したのち石垣島に帰任、補瀾師団長もこの日に帰任している。

引き返して歩兵第三聯隊本部付となる）を帯同、参謀長を始めまだった部下からの見送りを受け、中飛行場を出発、空路那覇經由福岡に向かった。

後任の納見中将は十六日午後一時空路台湾から着任、直ちに那覇へ向かい、第三十二軍司令官に申告、先島防衛についての任務を受けると共に作戦準備についての打ち合わせを行ない、沖縄ホテルに於て前任の補瀾中将より申し送りを受け、十七日正午帰任した。

陸軍の将官人事は原則として陸軍省人事局長が参謀本部総務部長と打ち合わせて原案を作り、三長官（陸相、参謀総長、教育總監）の同意を得て定める仕組みになって居り、例外として現地司令官の意見（インパル）作戦参加の師団長三名が軍司令官の強い希望で入れ替へられたのはその好例による場合があるが、今度の先島集團長人事は天降方式に決まったもので、事前に第三十二軍や第十方面軍には何らの連絡、相談はなかったようだ。

普通一般的の考え方としては補瀾中将は昭和十六年進級の古参将官、序列上も軍司令官に出てよい時期に来て居り、又当時戦線の拡大に伴なうて軍の新設、改編が頻りに行なわれている際でもあったので、順当な人事とみてよいが、決戦を目前にしての守将交替は必ずしも適切と

は云えない一面もあるようだ。後任の納見中将は十九年六月の進級、台湾憲兵隊司令官は通常少将職(？)だからそろそろ親補職である師団長転出の時期に来て居り、又中将は歩兵出身、シベリヤ南支で実戦の経験も豊富、難戦を予測される孤島の防衛には適材という含みもあって且一刻もゆるがせに出来ぬ緊迫時、所在地が直ぐ赴任可能な台湾と云う点なども動業されての人事ではないかと推測される。

参謀長の福地少将の栄転は師団参謀長が通常大佐職(たまには中佐、もしくは少将が充てられることもある)だから栄転は当然の人事だとみてよ。然し玉碎の危険にさらされている孤島に残される人々からすると当時もとも安全地帯と目されている支那大陸への転出は一種の望望の念を以て送られたことであろう。

然しこれは余談だが、福地中将はツツてなかった。福地中将は二十年五月軍司令部の北鮮(廣)移動後敗戦を迎え、そのまま連軍に抑留されてシベリヤ送り、苦勞を重ねた末、二十七年ようやく福地、又福地少将は南支でのB29塔架員処刑(二十年四月五日)の資めを問われて二十一年九月三日軍法廷第一審で死刑、翌二十二年三月三日死一等を減せられて終身刑に処せられ、巢鴨で服役中、二十八年十二月九日獄死すると云う悲運に遭った。陸路参謀の話では同少将はこの事件には直接関与していず、前任者からの引き継いだ決裁書類にサインしただけだったが、敢て異議を申立てず服罪したと云う、若し仮に宮古で終戦を迎えたとしたら無事復員したことは間違いないだろう。(福地中将が福地少将か、何れかでも宮古島に残っていたら宮古島戦犯事件は避けられたのではないかと関係者の一致した見方である。)

なおこれらの一連の人事について第三十二軍高級参謀八原博通氏は戦後の回想で、作戦準備に背馳した遺憾極まるものであると述べている。

福地中将主要要歴

明治二十三年東京都に生る、陸士二十四期騎兵科出身、海外駐在武官、陸軍省高級副官、昭和十三年から二年間第一軍参謀長として石家莊、大

横山大佐は第二十八師団の連隊長クラスの最古参、福地師団長とは陸士同期とも云われる。後任は宮川正少佐が命課された。又獣医部長の

第六章 敵機動部隊沖繩狙う

(1) 沖繩軍敵の新作戦警戒

宮古島に対する空襲は十月十日、十一日以来B24による偵察行動を除き殆んど杜絶していたが、二十年一月に入るや果然活発となってきた。小型機の来襲の外にマリヤナ基地から超空の要塞B29が飛来、高々度から精密な偵察飛行を繰り返して、宮古島に対する敵の関心が窺われた。一月以降の主なる空襲記録次の通り。

- 一月三日 艦載機若干、五日、二機、九日、十三日
- 大型機一機、飛行場及び船舶を攻撃
- 一月二十一日 四次にわたり延三十六機が来襲、船舶及び飛行場を襲撃、我が方は地上砲火でその二機を撃墜
- 二十二日 午前七時十六分から午後四時迄の間延べ二十機が来襲、飛行場及び船舶を銃撃、地上砲火でその一機を撃墜、このような頻繁な敵艦載機の来襲は敵の有力なる機動部隊が宮古島近海(台湾東方海上)に艦を落ちつけて南西諸島をネラッていることを意味し、状況は極度に緊迫してきた。
- 第三十二軍では一月二十二日午後五時三十分次々に発表された。この前後現地軍は敵上陸の虞れのあることを懸念していたよである。
- 本二十二日七時より十七時二十分頃迄敵艦載機延べ七四五機、敵次に互り南西諸島全域に來襲、銃撃す、我對空部隊の精銳はこれを迎撃し

原地区の会戦に参加、十六年陸軍中将に進級、名古屋(第二)留守師団長を経て在満州ハルビン第二十八師団長に親補(前任は石黒真藏中将、のちの在マライ第二十九軍司令官)山下季文大將の率いる第一方面軍(牡丹江)の隷下で北滿警備にあつて居たが、戦況急変により十九年七月宮古島に移動、先島集団長として先島群島の防衛を担任した。二十年一月十二日在漢口第三十四軍司令官に栄転、同年六月鮮滿國境成興に移り、終戦を迎えたが、ソ連軍に抑留され、シベリヤに送られ、ニコリス、ハバロフスクの將官収容所で過ごし、二十七年帰國した。

福地春男少将主要要歴

佐賀県出身で明治三十三年生、陸士第三十二期砲兵科出身、昭和二年陸大卒、参謀本部勤務、近衛師団参謀、イラン國駐在武官、大本營陸軍部参謀、ハルビン特務機関、関東軍情報本部員を経て昭和十五年大佐、十六年八月第二十八師団参謀長、十九年七月師団の移動に伴ない宮古島赴任、同八月一日付で少将進級、二十年二月南支へ転出した。陸大軍刀組の秀才、少将将校時代校友会に加盟、国家革新運動に役を買ったこともある。

佐賀の寒隠精神の流れを汲み蘇然、参謀連の起承した決裁書類等欠陥があつても頭ごなしに怒鳴ることなく、自らサツァツ書き直して済ませると云う式で、文章の旨さは定評があつたといふ。

(註)これより先十九年十一月二十二日付で輻重兵第二十八連隊長横山伊一郎大佐が輻重兵学校長(栄転)少将進級、師団副師団長走尾中佐も獣医学校へ転出、宮古島を去つて居る。

後任は補充されず、宮田誠也獣医大尉が代理を勤めた。

し、左の戦果(沖繩本島のふ)を得たり。
撃墜四十五機、撃破三十八機、我が方の損害極めて軽微なり。
尚、機動部隊に輸送船団なし。

不安と緊迫つづくうちに二月は過ぎ二月に入つた。この頃は夜間の海上交通もB24などの大型機に妨害されて航行不能となり、宮古島は空海からの連絡を絶たれ、全くの孤立状態に陥つた。目に見えない巨大な力がひしひしと迫ってくるような緊迫感が肌で感ぜられ、比島方面の戦況悪化とも俟つて絶望的空氣が漲りつあつた。

果然内南洋ウルシー泊地に集結中の敵機動部隊は十日頃行動を始め、その動向は予断を許さないものがあつた。

これにつき第三十二軍は次のように発表、麾下全部隊に対し、警戒態勢を厳ならしめるよう命ずると共に官民の覚悟を促した。

(現地軍発表)昭和二十年二月十五日十二時太平洋前進基地を發した敵機動部隊は数日前より行動を開始し、襲動しあるもの如く、諸情勢を総合するに十六日以降我が南西諸島は敵戒を要するものあり、このあとの空襲状況については明確な資料がないが、八月十五日の終戦時まで多い日は延べ三百機が來攻、とくに沖繩攻略作戦が開始された三月廿三日からは英太平洋艦隊の艦載機をも加え毎日平均數十機を算え飛行場、港灣施設、民家などに莫大なる被害を与えた。

十月十日から終戦時まで來襲した敵機は、
イ、戦士を目的としたもの四、四五〇機

ロ、哨戒(大型機)一三〇機
ハ、飛行艇(海上に墜落した味方機の救助及び哨戒目的)六七〇機
計 五、二五〇機に及んだ。

大型陸上機のうち支那大陸から、また廿年七月以降は神機から求取した小型機も若干あったが、そのほとんどは米、英、國機部隊から発進した艦載機であった。

これらの米機が使用した爆弾は二五〇キロ程度のものが多く、市街地にも大分投下され、強力な破壊力を発揮したが、ロケット弾は発射と同時に物すごい音を立てて心理的な面でも恐怖を与えたものである。

(2) 集団戦準備下令

先島集団では敵の来攻必至とみて十二日麾下全部隊に対し戦準備を命ずると共に興立女学校及び平良第一国民学校に設けられていた司令部を十六日急遽野原越に移し、戦司令部を開設した。

戦司令部は野原越と洞窟司令部の二つから成り、洞窟司令部は野原越の中腹をくり抜いた横穴の中に設けられ、甲戦備下令後は司令部の各機関がこの中に入ることになっていた。洞窟は十九年五月上陸した要塞建築隊第八中隊が主となって集団麾下の各部隊や民間人協力のもとに造られ、規模は明かでないが、如何なる砲撃にも耐え数百名の司令部職員が長期間生棲し、指揮機能が発揮出来るよう設計されて居り、入口は二カ所、東北部に向かつて開いて居る。この洞窟は六月二日の乙戦備下令後一時使用されただけで、平常は糧秣・彈薬・資材の貯蔵に充てられていたようである。糧秣部は洞窟入口に接し、師団長、參謀長宿舎、參謀部、副官部、管理室、兵器部、經理部、軍医部、獸醫部、通信隊、炊事所などを收容する茅葺き建物(師団長宿舎のみは瓦葺き)数十棟より成り、平常業務はここでとられていた。背面に野原岳を控えているので、南からの攻撃に対しては比較的安全だったが、北からの攻撃には位置をさらされるのが欠点だったが、この一帯は大休島の中央部

にあたり、戦司令部の位置としては最も適していたと云える。

島の最高峰野原岳は大正十年作製の陸地測量部地図によれば標高一九八、六メートル、集団では88高地と呼んでいた。山と云う丘にふさわしく、南の部分はゆるやかに傾斜して野原部下に接し、北側は一種の断崖状で山の形容がみられる。西北はなだらかな丘陵を経て東仲原に伸び、又東南には花切を経て新里へ一連の丘陵がつづいて居る。更にその東北に細竹を起点にウズラ嶺、長山、仲原をつなぐ標高百メートル位の丘陵が連なり、更にその東北は海岸沿いに下原、福里高地などが位置し、東北部からの攻撃に対しては地形的に極めて有利な条件に恵まれ、決戦場に選ばれている。

野原岳頂上にはヤグラ型の野戦用乙型哨戒機(陸軍用電波探知機、対飛行機警戒可能距離三百キロ)二基が設けられていたが、性能は余り良好ではなかったようだ。

集団の戦準備は野原岳を核心に宮古地区を北、中、南、東、海軍地区、伊良部支隊に分け、各地区に防衛を担任させ、敵進攻の状況に応じて兵力の機動集中を行ない、先ず水際決戦で上陸軍を破砕、これに失敗した場合は主抵抗陣地に据って持久出血戦をつづけ、最後迄敵の飛行場使用を妨害、戦局全般に寄与することを主眼としていたが、持久戦法の背景となる陣地構築が爆薬、コンクリート、工兵などの不足で予期の如く進まず、更に全島がサンゴ礁地質から成り、固い岩盤に掩われていることも作業進捗を阻む要因の一つとなった。又中央の呼号する航空決戦に副つて本意なく多量の地上戦部隊を飛行場設定作業投入を余儀なくされたことも陣地構築を大市に遅らせた原因の一つで、いろいろの悪条件が重なって二月末頃の陣地構築状況は所期の七〇%に達せず、若しこの時期に米軍の来攻を迎えたとしたら非常に苦しい戦いを強いられるのではないかと思われ、作戦主任の杉本參謀の回想によれば漸く自信の持てる陣地が出来あがったのは終戦の頃だったと云う。次に米軍の上陸作戦が行なわれたとした場合、とれくも持ちこたえられたかと言ふ点について杉本參謀はその時期、上陸場所、規模、友軍

の海空よりの協力の程度などの諸要素によって異なるが、沖縄攻略の後掃蕩作戦程度の規模なら数ヶ月、本格的な攻略作戦(沖縄島攻略)に先立って先ず宮古島を奪取して準備基地とする)に出た場合は

(一)第一波の水際戦に成功すれば三ヶ月
(二)第二波の水際戦に敗れた場合は一ヶ月が持久目標で、その見込みは十分ありと述べているが、要は仮定の域を脱せず、状況によってかなり変わったものになったと思われる。

これ迄の米軍の上陸作戦の慣用戦法から推して先ず制海制空権を完全に手中に収めることを前提にしているが、守備側は他地区からの兵力の増援は期待出来ない。従って手持ちの兵力だけで戦わねばならないので、消耗の度が増すに伴って戦力が低下し、しまいにはなき果てると云う結果に終っている。

宮古島の場合は九州及び台湾、上海方面からする友軍航空兵力の威力圏内に位置し、且守備隊上陸後三ヶ月も経ないうちに米軍の来攻に遭い殆んど無防備のうちに撃破されたサイパン島とは違い、防衛準備もある程度整っていることから推して、赤兎の首をひねるようには参らなかつたのではないかと予測も成り立つが何れにしても米軍の上陸作戦が行なわれたとしたら玉砕は免れず、特に石垣島や沖縄島とちがって地形平坦な宮古島では避難場所に恵まれないので、一般民間人の犠牲は予想以上に大出たのではないかと考えられる。

集団では戦開始となれば男子は老令者、児童を除き兵員の補充に、又女子は負傷兵の看護など衛生部隊の補助として使用することを計画していたようである。

二月十九日米大機動部隊は硫黄島に接近、上陸を開始し、太平洋の地獄と云われた硫黄島決戦の火蓋が切られ、南西諸島の危機は一応回避された形となったが、硫黄島の次は南西諸島がネトラれると云う予想は動かないとして軍官民の緊迫した空気が依然つづいた。

(3) 最後の輸送船も海底の藻屑に

硫黄島に、南方に、大陸に死闘つづくうちに二月は終り、三月を迎えた。三月一日早朝久しぶりに輸送船団が深水港(いまの平良港)に入港した。

この船団は陸軍輸送船隻坂丸(一、九六六トン、浜根汽船所屬、塩崎政義船長)乗組員四十四名、海軍輸送船大連丸(二、〇二〇トン、辰馬汽船所屬)と護衛の敷設艇つばめ(四五〇トン)の三隻で、大連丸は海上特攻艇と軍需品(糧秣・車輛・兵器・被服など)を搭載、鹿島島、宮江、那覇などを経て空襲と敵潜水艦の目を逃れ、よやく宮古まで辿りついたものだが、その時既に敵機の哨戒網にかかっていたようので、投錨後しばらくするとグラマン二機が飛来、銃撃を浴せて伊良部島方向へ飛び去った。

集団長納見中将は作戦準備上、重要欠くべからざる補給物資の無事陸揚げを期すため、対空部隊に対し船団護衛に万全を期すよう命ずると共に万一の場合は陸岸に乗り上げるよう手配を陸路參謀及び船舶輸送司令部宮古支部長入田少佐に厳命した。

海軍警備隊司令村尾大佐も又麾下の防空部隊を待候海岸に集結せしめ防空に万全の備えを固めしめた。

この間水上勤務隊に属する朝鮮出身軍夫百数十名(一)は船舶工兵隊と共に豊坂、大連両船に乗船、積荷の荷降し作業に取りかかった。緊張のうちに無気味な数刻が経過、ひる過ぎ突如東方から敵機連合十数機が空砲火を尻目にまず盛坂丸に銃撃を加えた。と、みる間に爆弾散発が命中したらしく、敵機のガソリンに引火、轟然たる音響と共に大爆発が起して黒煙天に押し、またたく間に海面から姿を没した。一方大連丸は全速力で右に左に敵機をかきわけて逃げ延びたが、とどきに一隊十数機、白川湾方面から飛来、集中攻撃を加えた。一弾が命中したらしく黒煙をふくとみる間に別の一隊十数機が急ぎの如く襲いかかり、たちまち船体から火を発生し、間もなく海面から姿を没した。

この一隻敷設艇つばめは艦長の巧妙の操縦で敵機の攻撃をうまくかわ

わし沖合に逃れんとしたが、ついに衆寡敵せず、直撃弾を蒙り、夕刻頃池間島と伊良部島の中間海域付近で海底の藻類と消えた。

敷設艇つばめは排水量四五〇トン、水線長六五、五米、最大巾七、二〇米、吃水二、一〇米、機関出力二、五〇〇馬力、軸数二、速力十九ノット、備砲八センチ高角砲一、機銃若干、機雷捕獲網三カイリ分その他、一九二九年七月十五日竣工、乗組員数は不明だが生き残りの下士官四十名は陸上に收容され、のち海軍警備隊に仮入隊している。人的犠牲者の数は明かないが、大建丸には船員五十四名、外警備員四十五名、海上挺進第二十八戦隊員八、同第二十八戦隊員三十四名の計一三一名、又豊坂丸は浜崎政義船長ら四十四名と警備員三十名(輸送船には敵機及び潜水艦の攻撃に備えるため、若干の部隊が常時配置され、高角砲、機銃、爆雷などの操作にあたっていた)が乗り込んでいたが、豊坂丸は轟沈状態だったため、かなりの犠牲者が出たようだ。従ってこの空襲を受けた軍人軍属及び船員の犠牲者は百数十名に上るものと推定される。

記録によれば生き残りの豊坂丸警備の海軍下士官六名、同船員二十九名、大建丸船長本田市太郎氏ら三十八名が救出され、のちに海軍警備隊に仮入隊している。

目撃者の話によると海面一帯が炎と化し、黒焦げの死体が多数浮供や下崎海岸に漂着したと云う。
宮古島に対する海上補給は豊坂、大建両船を最後に完全に杜絶え、以後は輸送機に依頼するのみとなった。納見集団長は両船の喪失に失望部下の措置適切ならざるものとして入田少佐らを強く叱責したと云われる。

前記広田、大建、豊坂の三船を除き昭和十九年十月から廿二年三月にかけて潜水艦で米海軍機の攻撃を受けて撃沈された船舶は次のようなものである。

船名 撃沈月日 トン数
第十興神丸 廿年一月廿四日 二六〇

第三興神丸 二四六
第四辰丸 廿年三月廿七日 一五六
第二南興丸 一月廿二日 八三四
この外社団法人史料調査会(富岡定俊理事長)の資料によれば、宮古近海で次のような多くの船舶が撃沈されている。

十九年八月九日
船名 船種 原因 トン数
昭慶丸 海軍輸送船 雷撃 二、五五七
日安丸 貨物船 雷撃 六、一九七
日満丸 〃 〃 一、九三二
神天丸 陸軍輸送船 〃 一、二五四
第二東勢丸 民貨物船 空爆 五〇〇
十九年十一月廿二日
船名 船種 原因 トン数
鳳山丸 民貨客船 雷撃 二、三四五
天草丸 〃 〃 二、三四五
十九年十二月十九日
雲竜丸 航空母艦 雷撃 二〇、〇〇〇
廿年三月一日

つばめ 海軍敷設艇 空爆
これらは宮古島向けの軍需資材や物資を積み、陸揚げ中を、あるいは南方から本土向け航行又は寄港中、米潜水艦及び航空機の攻撃を受けて撃沈されたもの、損害状況は不明だが、乗組員の大部分は船と運命を共にしたものと推定されるので、船員の犠牲者はかなり多かつたようだが、なお今次大戦を通じて沈められた日本船舶は実に二、三九四隻 八〇一万八、一二二トンに上り、船員の消耗率は陸海軍の二倍にあたる四十三%に及んだと云うから如何に船員の犠牲が大きかつたかがわかる。

第七章 沖繩戦幕明け

(1) 連続空襲始まる

三月も半ばを過ぎると硫黄島の戦いは既に敗れ、中部太平洋における日本の防衛線は全面的に破綻の様相を露くしてきた。西諸島近海の哨戒にあつた第八飛行師団(主力は台湾、一部沖繩)及び第二航空艦隊(主力は台湾)に属する哨戒機から敵機動部隊沖繩近海に接近中の飛報相次ぎ、緊迫感は一層と高まってきた。果せるかな、中旬南洋ウルシト環礁(パラオ諸島)及びレイテ方面を抜通した史上空前の米遠征団は千数百隻の艦船二分乗して沖繩攻めに向つた。

二十三日早朝米艦隊の大群は硫黄島連攻撃戦に呼応して宮古島に來襲、本格的空襲の火蓋が切られた。米軍は沖繩攻めに先立って先島群島からする特攻機の攻撃を事前に制圧するべく、同方面の航空基地の徹底的破壊に乗り出したのである。三十日には延べ五十機が來襲、飛行場及び港施設、平良町西里の無電受信所、女学校などに破壊を加え、かなりの損害を与えた。集団司令部は二月中旬に野原越に移動、各部隊も陣地に移ったあとだったので、兵員、資材の損失は殆んどなかったが、大編隊による空襲は官民に大きな衝撃を与え、住民は我れ先にと郊外に避難、市街は無入同様の死の街と化し、日中は防空壕生活を余儀なくされた。

(2) 特攻の戦果あがる

一方四月一日無慮二千隻の大艦隊と一千機の大空軍にまもられて沖繩本島に上陸したアメリカ第十軍(陸軍二個師、海兵二個師)は堅固な酒

窟陣地に據る日本軍(第六十二、廿四師団と独立四十四旅団、軍砲兵団基幹)に遮られて四月末になつても日本軍の本首里城の外郭陣地嘉数城間、伊祖、前田、棚原の線が抜けず、戦線は膠着状態に陥つた。この方面を担当する第六十二師団は歩兵四個大隊を基幹として編成された独立混成旅団二個からなる警備師団だったが、前任地の北支で数回にわたつて実戦に参加、大隊長クラスに有能な将校が多く、又師団長藤岡武雄中將は豪胆沈着をもつてきこえた将軍、優勢な敵を向こうに回して一歩も退かず米軍の進出を阻止すること月余に及んだ。

この間日本軍の特攻攻撃は三月廿七日の広森中尉ら九機による第一陣を皮切りに八月十三日迄、或は二百機内外の大編隊をもって、或は数機の少数機をもって薄暮又は黎明を衝いて行なわれ、陸海合わせて実に七、八五二機が出撃、その半数近くを失った。

これらの特攻機は九州及び台湾から発進したが、陸軍機は宮古島、海軍機は主として石垣島飛行場を利用した。台湾を発進した特攻機は夕刻中飛行場に着陸、整備及び燃料の補給を受け、あけ方敵艦隊を求めて沖繩近海めざして飛び立つたが、大規模な特攻が行なわれた翌日は白川湾方面に多量の敵軍需品や資材が漂着、又無電の傍上によつて敵の混乱状態が確認され、特攻の効果があつた事が推察された。

特攻による損害の予想以上に大きいのに驚いた米軍はマリアナのB29の大編隊をして九州、台湾の航空基地を制圧せしめると共に先島飛行場に対する攻撃を強化、三月下旬頃からは英太平洋艦隊も参加、宮古島の上空にも英国機の見受けられるようになった。

友軍対空部隊は全力をあげて敵機のような襲撃を展開、飛行場防衛に全力を尽くしたが、敵機の行動はなかなか勇敢巧みで容易に撃ち落とせなかつた。

師団情報班の記録では終戦迄宮古島上空で撃墜した敵機は四十五機、同撃破五十機を算したが、陸上に墜ちたのは十数機で、残りは海上に逃れ、塔乗員は味方の水上機によってほとんど救助された。宮古島近海の制海制空権は米軍の掌中に帰っていたので、海上にさえ逃がれることができた間違なく助かるというのが実情だった。

日本軍陣地の目と鼻の間しか離れていない海上に墜ちた米機の塔乗員を沖繩から飛来した水上機が悠々と着水、救助に見えている光景を目のあたりに見ながら手も足も出せず、地団駄踏んで出逃がさざるを得ない日本軍将兵の心情は全く無念の一語に尽きた。こういう場合はグラマン敵機が上空を旋回、日本軍の攻撃に備えるのが米軍の戦法だったが、日本軍の発砲は陣地暴露を避ける為禁止されていたので、米軍の傍若無人な振舞いに対しても拱手傍観せざるを得なかった。それにしても一名の飛行士を救助するためわざわざ水上機を呼び寄せ、敵機が上空警戒に任ずるアメリカ軍の余裕しゃくしゃくたる戦斗ぶりは物置を誇るアメリカならでは容易に申し得ざるところで、あまりに著しい国力の相違を感じしめる一場面でもあった。

米機は爆弾、機銃弾の他、ロケット弾を使用したのが、物凄く音響を発生し、白煙の尾を引きながら飛ぶロケット弾は心理面で及ぼす影響が大きかった。しかし空襲が定期的にくり返されるようになると、住民の恐怖心も次第に薄らぎ、嫌の外へ出て畑作業をする姿も散見され、一種の空襲免疫性の様相を呈した。時たま大型機による雲上目標などが行なわれることもあり、非戦士や家畜がそのトパッチリを蒙って死傷する者も出てきた。

(3) 飛行場防衛に全力傾注

四月一日米軍はついに沖繩本島に上陸したが、この日宮古島の上空は早朝から米機艦載機の大群に掩われ、終日猛爆にさらされ、両飛行場周辺は爆弾の炸裂音と機銃音の交錯で耳ももうせんばかりだった。米機の

主目標は飛行場の滑走路と誘導路及び掩体(土手を築いて中の友軍機を守る)に向けられ、二五〇キロ爆弾を雨アライの如く降らしたが、地上砲火の威力圏に近づくとを避けたため、弾の多くは目標に命中せず、又不発弾も少なかったという。中飛行場の対空戦は輻重兵第廿八連隊玉木峰司少佐が指揮、飛行場周辺の高地及び平地に布陣した機関砲及び機関銃がよう撃にあつたが、爆弾、ロケット弾、機関砲雨下のおかげで対空戦に火花を散らした対空部隊の奮戦攻守は宮古島防衛戦を通じて最大の華だと云える。一資料によればこの日米機は米機の延べ機数は三百機に及んだというから如何に猛烈な攻撃を受けたかがわかる。防衛隊戦史保管資料によれば、四月中の米機撃墜数について判明せる分は次の通り。

(三日)一四〇機(五日)二〇〇機(七日)五十八機(八日)一三〇機(九日)七十七機(十日)十九機(十三日)二十三機(廿日)五十八機

米機は空襲は初め専ら軍事施設のみに限られたが、次第に非軍事施設にも及び、なかでも密集地の多い平良市街もその対象にふくまれるようになった。機銃周辺及び市内目貫き地点にも大型爆弾と焼夷弾が落ち始め、市街地の損害も目立つようになった。これにともなって非戦士員の被害も出るようになり、防空壕に直撃弾を浴び、待避中の一家が全滅したところや逃げ遅れて機銃にやられて死傷する一般住民も少なくなつた。とくに始末の悪いのは時限爆弾で、何時爆発するかも知れないので、落下地点付近は立ち入りも出来ず防火活動をなやませた。機銃周辺には五百キロ級の大型爆弾で直徑三、四間もある大穴が数か所あき、さながら小さな人造湖を思わしめるものがあった。市街地の住民が踏み止まった者は敵機の来襲が杜絶した日没頃まで出て帰宅、食事をとってホッと一息つく調子。うすくらの灯の下で催かの悪いの時間をとる市民の表情はわびしく、なかには住家を破壊された住家な市民もかなりあり、戦争のもたらす悲惨を肌で感じせしめられたが、当時は生命すらも保証し得ない逼迫した状況だったので今日の無事をかけての生活だった。

野原岳に戦斗司令部を開設した集団では米軍の沖繩上陸によって差当たっての宮古島上陸の危険は去つたと判断したものの、沖繩戦の状況如何によっては宮古島米軍の公算も少くないとの判断に立つて陣地構築にヒツチを上げると同時に上陸戦に備えての部隊の教育訓練の強化に力を入れた。更に航空機による沖繩特攻作戦に遺憾なきを期するため、昼間空襲でこわされた飛行場の補修工事に全力をあげた。この飛行場作業には始め飛行場大隊と近郊の部隊が動員されたが、何しろモッコと円ビにてデコボコになった滑走路の整地をするのだから能率があがらず、四月に入ってから特攻作戦の本格化に伴って全部隊が交替で作業に動員されるようになった。しかし切角修復しても翌日はまた爆撃で大穴を明けられるという調子で、まるで破壊と修復のイタチごっこだった。この状況を見た納見集団長は持ち前の果敢とを發揮して修復作業に戦車部隊の投入をきめ、城辺村長間地区に布陣していた戦車第二十七聯隊第三中隊(渡辺兎米大尉)に出勤を命じ、戦車の前方に急造の排土板を装着し土砂を崩壊で開けた穴に押し込み、ぶさくという式の一連の連襲アルトイザーとした。この戦車改造アルトイザーは人力の数十倍の威力を發揮して修復作業に大きな効果を取め、特攻機の飛行場利用を著しく便ならしめたが、戦車部隊は戦車を本来の目的以外に利用することは必ずしも果敢でなかったようである。然しこの臨機応変、決断と実行力に富む措置は納見集団長の性格の一面の現われであり、恭儉を敬服せしめたとい

(4) 中飛行場上空で初空中戦

第十方面軍(在台湾)では沖繩に対する航空作戦を強化し特攻機による攻撃を容易ならしめるため、中継基地である先島群島所在飛行場の運用を強化することになり、四月七日第三十二軍司令部に対し「先島群島における航空基地を徹底的に強化し、航空作戦に支障なからしめるため

め、先島集団をして当分の間上陸防衛作戦を顧慮することなく、全力を航空作戦に協力せしめることを命令した。先島集団ではこの主旨に副つて飛行場防衛作戦を強化するため、これまで主として高射機関砲及び高射機部隊が担任してきた対空戦法に敵機を除去し山砲、歩兵砲、速射砲などの全砲力を投入、押し進め戦法で重砲の撃退をはかり、師団兵器部が開発した壱式空中爆雷をも試用、若干の効果もあげたが、この頃になると敵機の行動は極めて敏捷軽快、巧みに対空砲火網から逃れ、予期した程の戦果はあがらなかつたようである。

対空戦斗強化と併行して飛行場の補修作業は昼間も強行されることになり、四月二十二日午後四時頃から友軍機の掩護の下に始めての白昼作業が実施された。

この日は珍らしく敵機の来襲は閑散で上空には在台湾第八飛行師団から派遣された陸軍三式戦機(この点正確をかく)敵機が警戒飛行にあたり、久方ぶりで白昼仰ぐ日の丸銀翼に作業隊の士気が大いに揚がり、復旧工事又トントン拍子に進み、十数機の特攻機が滑走路付近に並び、まさに発進体制にあつた。夕刻警戒機が任務を終えて引き揚げんとした際突如敵機の一隊が来襲、低空すれに地上の作業部隊に攻撃を加えると共に一隊は日本機に襲いかかり、宮古島上空で初めて空中戦が展開された。不意打ちに狼狽した作業部隊はクモの子を散らすように待避、崖の中から固唾を呑んで空中戦の成り行き如何を見守った。空中戦は彼我秘術を尽して猛烈な戦いが、戦勢友軍機に利あらず、友軍機は被弾、損害続出、機は火を吹いて墜落、敵機は白煙を引いて戦場を離脱して引き揚げた。地上に待機中の友軍特攻機は敵機の地上掃射を受けて飛び出した数人の将校と下士官があつた。と見る間に滑走路付近に並んでいる友軍機にバツタの如く飛びついて必死の力で掩体目掛けて押し出した、まさに決死勇戦行動である。この時は敵機の攻撃は幾分小止みになっていったが、上空には未だ敵機の姿が見受けられ、状況は逼迫していた。然しこれらの一団の將校は身の危険を顧みず、この重大任務

に挺身した。この殊勲の將兵は地元編成の特設警備隊第二〇中隊（宮城清昌中尉、現大東糧業専務）の池原万栄少尉と輔軍兵第廿八聯隊の將校、下士官三名だった。師団では武功拔群なりとして賞詞を授け、全部隊に布告した。

池原中尉は復員後現在嘉手納農協長をつとめているが、当時を回顧して次の如く語っている。

「地上に待機中の敵機の友軍機のうち、端の一機が煙を吹き出した。放っておくと次々に炎上する虞れがあると判断、咄咄に飛び出して真中の機を押し出した。外に数名の將校と兵が協力してくれた。その時は無我夢中だったので、敵機が上空にいるかどうかも気が付かなかった。軍人として当り前の事をしただけだが、数日後師団司令部から呼び出されて一瀬参謀長から賞詞を授けられ、大いに面目を施した」

白昼の飛行場作業は池原少尉らの挺身敢闘を生んだが、空中戦では彼我の實力の相違が暴露され、將兵の士気に影響するところが少くなかった。

（註）賞詞は兵団長（師団又は旅団長級）が出す一種の表彰状のようなもので、感状よりは一段低い、感状は原則として軍司令官以上、又は

独立師団長（例えば小笠原兵団長のような方面軍や軍に属せず、大本營直轄の団長）しか出せない。

(5) 宮古島から沖繩へ兵力増援を企図

第十方面軍では第三十二軍の攻勢を支援するため地上兵力の増援を計画、宮古島から歩兵數個大隊を小舟艇で沖繩本島へ輸送する案について準備研究を先島集團長に命じた。別資料によれば機帆船五十隻、大型舟艇八十隻を使用することになっていた。集團では陸路参謀が中心となって船舶工兵隊長らと交えて実施方法を研究したが、当時敵艦大和のような不沈艦と云われた巨艦でさえも沖繩近海に近寄ることが出来ず、途中で撃沈された一事に徴しても明かかしく、制海制空権は完全に米軍に握られ、文字通り蟻の這い出る隙間もない程封鎖されて居り、全く実施不可能の状態であった。間もなくこの計画は中止されたが、陸路参謀は全く無茶なことを云っているので、板ばさみになって困ったと、戦後の回想で語っている。

第八章 全島を震撼せしめた艦砲射撃

(1) 英太平洋艦隊出現

四月は空襲に明け、空襲に暮れ五月に入った。この頃の沖繩戦局は最高潮の激しさを加え、日本軍はギリ押しに押され、敵の先鋒は卅二軍司令部の立てこもる首里城に迫りつつあった。日本軍は戦略持久の方針を

堅持して、埴間は洞窟内にひそみ、夜間斬り込みによる肉迫攻撃を反復強襲、戦車に対しては爆雷を抱いての体当たり攻撃を敢行、敵上陸軍に多大の出血を強要したが、物量を誇る米軍の猛攻に抗する能わず、次第に後退、島の南部地区に追いつめられつつあった。軍は五月四日九州、台湾からの特攻に呼応して首里前線一帯に於て一大攻勢を実施したが、陸海空よりの敵猛砲火に阻まれ、死傷者続出、一日で攻勢を中止するの止

むなきに至った。日本軍は爾来一切の攻勢を中止して六月廿二日の玉碎まで専ら防禦戦に終止した。

第卅二軍が攻勢に転じた五月四日宮古島は英太平洋艦隊による艦砲射撃を蒙り、全島を震撼せしめた。

この艦砲射撃を実施したのは沖繩作戦で先島方面の警戒攻撃を担当したローリングス大將の指揮する英太平洋艦隊（戦艦キングジョージ五世、戦艦ハウ、空母インドミタブル、ピクトリアス、インデペンディヤブ、イラストラパス、巡洋艦スイフトシューア、ガンビア、ブラックプリンス、アーゴノート、ユーリアラス、駆逐艦十一隻、計廿九隻）のうちのキングジョージ五世（マレー沖で日本軍に撃沈されたプリンス、オブ、ウエールズの姉妹戦艦）を基幹とする戦艦二、巡洋艦五、駆逐艦十一、計、十八隻と記録されている。

英艦隊宮古島近海に接近の報は同日早朝関係部隊へ伝えられたが輸送船を伴わないところから推して、上陸作戦の虞れなしと判断された。この日明から日し、艦烈を極めた連日の空襲もピタリと止み、敵機がさかんに上空を旋回しているのが目撃された。敵艦隊接近の報は一般住民に知らされなかったため、人心の動揺は見受けられなかったが、何かあるとの感じがあった。果せるかな午前十一時頃宮古島西南方数マイル沖に出現した英艦隊は同十五分、一斉に砲門を開きおよそ卅分にわたって三八五発の巨弾を中、海軍、西の三飛行場に撃ち込んだ。いんいんたる砲声と巨弾の炸裂音は全島を揺るがした。事情を知らない一般住民は艦砲射撃の次に来るべきものは上陸だとばかり、色を失ない、慌てて防空壕に逃げ込む者、家族相ようして死を覚悟するなど、不安動揺いちるしいものがあった。

英艦隊は閃光を放ちながら悠々と射撃を続け、しばらくして南方へ姿を没したが、白色の艦隊は嘉手納、宮國沿岸からハッキリ目撃された。集團司令部では各種の情報通信を綜合した結果、単なる威嚇射撃の域を出ないと判断していたので、城辺町の友利砲台（十四センチ海軍砲二門）及び嘉手納入江砲台に対して応射を禁止した。これは敵上陸前に砲

台の位置が暴露することとされるため、敵の射撃が被撃でせしたることとはないと判断したのによるものだった。

この艦砲射撃は島民に大きなショックを与えたが、損害は軽微に止まった。中飛行場は落下したもののうちには不発弾がかなりあり、想像していたような破壊力は発現せず、結果的には一種のコケ巻しに終った。早朝から上空を旋回していた敵機は弾着の観測連絡にあたっていたもので、艦隊の退避にもなって退去した。

最初にして最後の艦砲射撃であったが、一時は上陸の前ぶれではないかと軍官民の色を失なわしたものである。

資料によれば沖繩で日本軍が攻勢に転じた戦局の局面新展開に応じ、連合軍が日本軍の関心を宮古島に向けさせるための云わば一種の陽動作戦とみてよいようだ。

これについて陸路参謀は戦後の回想で「当時の状況では機動部隊が輸送船団を伴わないからと云って直ちに上陸の算なしと断定することは出来なかった。従って或いは敵が上陸を企図しているのではないかとの見方も強かった。私自身も輸送船団が後方からついて来る公算が大きいとして一時は真険にその対策を考えていた。司令部の空気がかなり緊迫していたように覚えている」と述べている。

(2) 米・宮古島攻略作戦中止

四月二十六日米太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督は宮古島攻略作戦の無期延期を命じた。

米軍の南西諸島方面攻略の段階は

第一段階 沖繩本島南部（慶良間島および慶良間列島を含む）攻略

第二段階 伊江島の攻略、沖繩本島北部の制圧

第三段階 沖大東島、久米島、宮古島、喜界島、徳之島

の攻略に分けられていた。

第三段階では久米島だけが航空警戒網拡大のため六月二十六日米軍が

上陸したが、その他の攻略作戦は実施されなかった。
宮古島などの攻略を延期した理由は次のようである。

沖繩本島に上陸後米軍は沖繩本島を偵察した結果、長距離爆撃機（B29）の飛行場適地があることをニミッツ大將に報告した。
ニミッツ大將は統合参謀本部（参謀）に宮古島攻略中止を献言し、四月二十六日攻撃の無期延期が通知された。
なおこのほか第三段階作戦使用に予定されていた第五海軍団が硫黄島作戦で甚大な損害を受けたことも多少原因するかと推察される。
このような米軍の南西諸島攻略作戦が変更されたことは大本営はもとより現地軍側の察し知るところとならなかつたので、先島集団では米軍の上陸を予想して戦備を怠っていた。

(3) 先島集団を才十方面軍直轄に

空襲は五月一杯も間断なくつづけられ、一資料によれば同月の米空襲機数は二千機を越えた。この頃からは市街や非軍事施設に対する無差別爆撃が本格化し、非戦闘員や家畜の被害が目立つようになった。平良の市街は連日の集中爆撃と民家や公共建築物の一部が兵舎に充てられるため取り壊されたため、周辺部の一部を残し、殆んど破壊又は焼失し、廃墟と化していた。

沖繩の戦力は五月下旬に入るや絶望的な様相を呈し、第三十二軍司令部は二十七日首里を放棄して南部に落ち延びた。大本営では第三十二軍の先島集団に対する指揮能力は事実上喪失したものと認め、指揮系統の混乱を防ぐため、三十日先島集団を第三十二軍の指揮下から外し、第十方面軍（台湾）司令官の直轄とした。同時に大東島守備隊（歩兵第三十六連隊基幹、田村権一大佐、十九年七月第二十八師団の隷下を離れて第三十二軍司令官の指揮下に入る）は七月四日（別資料によれば六月七日）第二十八師団に復した。又海軍警備隊も五月三十日をもって沖繩方面海軍根拠地隊（大田実司令官）から離れて高雄海軍警備府司令官の指

揮下に入った。

(4) 乙戦備下令、兵力を集結

先島群島に対する敵上陸の懸念は五月から六月一杯つづいた。第三十二軍は五月十八日米軍の増援部隊に関する中央の緊急放送として次の参謀長電を先島集団に通報した。
諸情勢ヲ綜合スルニ敵ハ沖繩方面ノ現戦況ニ関連シ、十日前後沖繩本島方面ニ対シテ強力ナ増援乃至奄美大島就中喜界島状況ニヨリ先島方面等ニ新ニ上陸ヲ開始ノ算大ナリ、ソノ兵力ハ二箇師団内外ト算定ス海軍側も五月十五日南西方面に敵が新たな作戦を開始する兆候があることを認めている。

この報に接し奄美地区では全地域に甲号戦備を下令、対陸上戦斗を準備したが、先島集団では特別の措置をとらなかつた。二十日になって沖繩本島に対する増援の動きと判明、上陸の危機は回避されたが、六月に入るや敵の先島方面に対する上陸の動きが顕著になってきたので、第八飛行師団ではこれに備えるため、沖繩に対する航空作戦を中止し、兵力温存をはかった。
先島集団では敵の上陸乃至は空挺部隊による宮古島攻略の企図が濃厚として六月二日乙戦備を下令した。麾下各部隊は洞窟陣地の整備、野菜、樺株の洞窟陣地搬入、戦斗準備など戦備を強化、敵来攻に備えたがこの時点では未だ陣地構築は所望の域に達していなかつた。
納見集団長はこれ迄の島より防禦戦の戦訓などに徴し、兵力の分散配置は徒らに各個撃破を招き、持久の目的に副わぬとの判断から伊良部島の独立混成第五十九旅団主力を宮古島に移動させ、兵力の集結をはかった。これは集団長の法断によるもので、配置変更後第十方面軍司令官に報告しただけに止めたようである。先島集団の防禦戦法については集団長に一任され、第三十二軍及び方面軍は極力干渉や指示を避けた。従って兵力の配置転換は集団長の裁量に委され、人事についても臨時的な措置

置は如何なることでもその権限内で行使用することが出来たようである
伊良部島の防衛は昭和十九年九月以降第五十九旅団が担任、兵力は旅団司令部、歩兵三個大隊（一個大隊は独立第五十九旅団長の指揮下に入り、東地区に配置）砲兵一個中隊、工兵一小隊、有線無線一小隊、野戦重砲兵一個小隊（協力）で、独立第三十九大隊が佐和田部落、第三十九大隊が国仲、第三十九大隊が伊良部々々に位置、旅団司令部は国仲部落に置かれ、下地島及び伊良部島南岸を上陸予想地点に選定、同方面に重点配備すると共に長山高地（標高八十八メートル）に野戦砲隊十五サッチャ砲隊三門を秘匿、平良方面に上陸する敵を背後から攻撃する手筈になっていたが、集団命令により主力は六月始め機帆船、舟艇等によって宮古島平良港に転進、北地区の守備に就いた。この海上機動は敵砲隊の目をかすめて夜間を利用して行なわれ、くり舟送も動員された。この輸送は輸重兵第二十八聯隊が担任した。主力の転進後は独立第三十九大隊長竹内隆大尉の指揮する伊良部支隊（およそ歩兵一個大隊基幹）が渡り、同島の守備に任じた。同支隊の伊良部島防禦についての方針は次のようなものである。

- (一) 下地島を主体に数多くの偽陣地（偽兵配置）を構築し、敵の主攻撃を同方面に誘致し挺身斬り込み等を敢行し敵戦力の消耗を図る。
- (二) 伊良部東海岸の水際を堅固に占領し敵の上陸を阻止、同地区を死守し宮古島主力の戦斗を有利ならしむ。

(註) 本項は独立第三十九大隊長竹内隆大尉の資料による。
伊良部島を撤し平良町に転進した独立第五十九旅団長多賀少将は北地区隊長富沢大佐（歩兵第三十聯隊長）に替って北地区隊長となり、歩兵第三十聯隊を併せ指揮して同地区の守備を担当した。これに伴ってさきと同旅団から離れて独立混成第六十旅団長の指揮下に入り、東地区（城辺町）平安名岬一帯に配置されていた独立第三十九大隊（藤本幸男大尉）は同旅団に復帰、北地区の守備兵力は大巾に強化された。第五十九旅団の平良町転進後の配置は次の通り。
旅団司令部 添道

独立第三十九大隊 西原
三九四大隊 大浦
三九五大隊
なお余談だが、配備変更に伴って混成旅団長の指揮下に入れられた富沢大佐（歩兵第三十聯隊長、北地区隊長）は、この措置に強い不満を抱いていたようで、爾後旅団長との仲がシラケリせず、旅団司令部と聯隊本部との間、摩擦対立を生ずる場合もあつたと云われる。

(5) 六月も空襲さかん

日	機数
一日から十日迄	八三三機
十一日から十四日迄	三七〇機
十五日	六十機
十八日	八十四機
十九日	六十六機
二十日	六十機
二十一日	百機
二十二日	五十八機
二十五日	六機
二十六日	四十四機
二十七日	十機
二十九日	四十三機
三十日	三十九機

敵機の攻撃目標は主として飛行場に向けられたが、一部は陣地、兵舎、民間建物、部落等にも向けられ、人畜の被害もかなり出るようになった。
二十二日第三十二軍との通信連絡は杜絶、沖繩戦の終末近きを思わしめた。

第九章 敵上陸の危機遠のく

(1) 長期自給態勢を確立

先島集団が宮古島で当面した問題のうち食糧の自給態勢の確立は一日もゆるがせに出来ない重要性をもっていた。宮古群島には一番多いときでおよそ七万数千名近くの人口を記録したが、戦争の拡大にともなうて招集・徴用、島外疎開などが急速に行なわれた結果、集団主力進駐後十月頃は六万五千人に減少していた。然しそこには三万名の陸海軍特兵が加わったため、人口はおよそ九万五千人にふくれ上り、これだけの人員の食糧をどうやって調達するかが大問題であった。

集団は進駐当時、当面の需要をまかなえる糧秣を携行、更にかなりの量の追送を受けたので、主食の面では二十三年三月二十日現在、精米及び小麦三二二二トンを保有、定置一人あたり一日七五〇グラム支給（支給人員は終戦時の調べて二万五千名、海軍は別）とするとして五ヶ月間は維持できる計算になっていた。

然し七月以降敵の攻撃の重点が本土に向けられ、戦いの舞台は沖縄を通り越して本土へと移っていった。このため先島群島は戦場の焦点から外され、取り残された感が強くなってきた。事実これを裏書きするかの如く間断なく続いた空襲は七月以降小規模且サミグレ式となり、一日に三十六機、二日四十機、十五日五機、二十九日十八機に減少、一機も姿をみせない日もあった。

集団では敵上陸の危機は去ったと判断、軍民の間にはようやく生息が取り戻した。然し戦いは何時果てるとなく続き、今度は風塵と戦わねばならなかった。集団の保有糧秣のうち六十三名は上陸後十月迄の間に追送されたのだが、十一月以降は殆んど補給が杜絶されたため、手持ち食

糧の食い延ばしと自給による食糧の現地調達を強化する必要性に迫られた。舟艇や機帆船による台湾からの糧秣、軍用品の輸送も考えられたが、敵哨戒機の見張りや敵艦成功の率は極めて少なかった。

宮古島では水田が乏しいので、主食の米は台湾からの輸送に仰ぎ、昭和十五年米の配給制実施以来、非農家成人一人当り一日平均二合三勺の配給量が確保されていたが、海上交通が危険になるに伴って輸送が杜絶え、十九年七月以降の配給量は一人一合八勺に減少していった。配給業務は食糧管理支所が扱っていたが、二十年三月以降は空襲の激化で、配給業務は事実上停止状態となった。このため同月以降は非農家も主食を甘藷に依存するようになり、主食に占める甘藷の比重が絶対的となったが、日中は敵機が常時上空に所在していたため、農耕に支障を来し生産は思うように進まなかった。

集団では進駐以来主食の代用としての甘藷に着目、宮古支庁・各町村・農業会などの協力を得て民有畑の一部を供出させ、農耕班・漁労班などを組織して甘藷・生野菜の増産、魚介類の入手確保につとめる一方大野山林内に製紙工場、伊良部島に二カ所の製塩所、野原越に織物工場などを開設、自給自足につとめたが、所期の成果がみられず、ただ塩のみが必要量の六十%を充足する程度に止まった。

集団の将兵は上陸以来飛行場造り、陣地構築、教育訓練などに苛酷な労働を強いられ、給養の低下、居住条件の悪化、陸軍関係の戦没者二、四〇九柱の大部分が栄養失調、マラリアなどの悪疫によるものだった。このような将兵の体力低下は戦力を著しく減殺するものとして集団でもその対策を重視、更に長期駐留に備えて食糧の自給自足に本腰を入れることになり、左のような方針を樹てて主旨の徹底につとめた。

幸いに七月からは空襲も小止みになり、日中の農耕作業も可能になったので、軍民の総力を挙げて自活態勢強化に取り組み、民間人にまじって甘藷の植付け、畑の手入れに精出す将兵の姿が散見され、成果があがるようになった。

宮古島軍民自活態勢確立策案

方針

軍・民に周知徹底ナル計画ノ下軍官民ノ持久自活ノ態勢ヲ確立シ民ノ勤勞精神ヲ最高度ニ發揚セシメ生産力ヲ面期的ニ増強ス。民ノ自活態勢ヲ確立スト共二軍ノ食糧協力ヲ強化シ軍ノ戦力ヲ拡充強化ス。

施策

其ノ一 軍隊側

- 一、徴備民ノ整理
 - 民ノ徴備茲ニ奉仕ヲ最少限ニ制限シ婦農セシム。徴備人員ハ新タニ示ス補給費ノ制限内ニ於テ地区隊長ニ於テ審査決定認可ス。奉仕的ノモノモ同シク地区隊長ノ認可ヲ要ス。
- 二、軍徴民ノ自活
 - 軍徴民ニハ總テ自活ニ必要ナル農耕ヲ実施セシム。之カ為メ徴備部隊長ハ所用ノ時間ヲ与フルモノトス。
- 三、特設警備部隊ニ対シテハ農繁期ニ於テ所用ノ自活休暇ヲ与フルモノトス。
- 四、徴備ノ資金ハ集団ニ於テ決定示達スト共ニ各部隊ニ対シテハ補給費ヲ制限配當ス。
- 五、軍需畑甲ノ管理ヲ適正ニシ農耕督勵班ノ活動ト相俟テテ取ヘノ食糧供出ヲ根本的ニ刷新セシム。
- 六、軍需畑乙ヲ極力向上シ軍自活態勢ヲ強化ス。
- 民ノ農耕勞務ト供出ノ成果トニ鑑ミ逐次軍需畑甲ニ転換ス。

(2) 給与状況、全般に悪化

終戦後の二十年九月第二十八師団経理部では先島集団の給与状況などについて次のような報告を復員参考資料として提出している（石垣島・大東島関係を除く）以下はその主なる抜粋。

- 一、食糧増産一本二民力ヲ結集シ全農主義ニ徹底ス
- 二、農家ニ対シテハ其ノ農耕能力ニ応スル軍需畑甲ヲ配當セシメ責任制ヲ以テ確實ナル供出ヲ実施セシム
- 三、甘藷ニ野菜類ノ公定債務ヲ決定シ之カ取捨ヲ至嚴ニ監視主義ニ依リ確定ス
- 四、非農職域ヲ嚴選決定シ之ニ対シテハ甘藷ノ配給制ヲ実施ス
- 五、軍ノ徴備者等ノ婦農ト共ニ民ノ勤勞動力運動ヲ強力ニ実行ス

九月中ニ於ケル給与状況ハ別別第三ノ通りナルモ玄米ノ如キハ概簿上ノ給与重ニシテ各部隊ノ長期保管中ノ損腐乱相等ノタメ実給与量ハ三五〇乃至三〇〇グラム程度ナリ。且下ノ玄米給与量ハ長期二五〇グラム程度ニ上リタルモ副食物無キ為給養ハ良好ト言ヒ難キ状況ナリ。而モ現在ノ給与重ヲ維持セシムル補給少ナキ現況ヨリ前途暗澹タルモノアリ。之カ解決策トシテハ台湾ヨリ補給強化ヲ仰ク

カ符又急進ナル内地掃蕩ニヨリ以外途ナキ現況ニアリ

(一)被服事項
被服ハ昨年出発時ノ被服ニシテ陸以米備袴袴下及毛布補修材料等一部補給ヲ受ケタルモ運駐以來一カ年余ヲ経過シ此ノ間急進ナル飛行場作業ト陣地構築等ニ依リ衰損度甚ダシク殆ンド裝外底品程度トナリアリ(一部略)

特ニ先島集團ハ冬季ニ於テハ相当温度低下シ出発時ノ被服ニテハ保衛上憂慮スベキ状況ナリ

尚本島ニ於ケル被服ノ劣悪ナル状況ハ第三十二軍ニ於テモ特ニ考慮セラレ昨年度ニ於テ冬季用毛布一人三枚、冬備袴袴下各二組宛補給セラル答ナリシモ船舶ノ關係上不能トナリ其ノ後補給モ全ク不能トナリ現在ニ至レリ

○着 補給ヲ受ケテ更新ヲ実施セリ

(二)備品事項
進駐以來補給セラレシ備品トシテハ僅少ナル日用品、應紙、事務用消耗品、殺虫剤、防虫剤ナルモ過去一年間中ニ於テ殆ンド消費シ現在保有シアルモノハ極メテ少量ニ過ギザル状況ナリ

(三)建築物構造施設(略)

(四)建築資材
追送資材ノ利用殆んど不能ニシテ現地資材松丸太、茅、茅繩等使用ニ努ムル一方疎開民家解体材料五百棟(約一万坪)分ヲ購入シ建築資材ニ充當シ稍々効果ヲ挙ゲ特ニ患者収容施設ニ利用セリ

(五)現地自活
(1)農産(甘蔗)
集團ハ進駐当初ヨリ糖株補給ノ困難ナル状況ヲ察知シ本年一月ニハ甘蔗ニヨリ完全自活ヲ樹立シ九月以降ハ完全自活態勢ニ移行スベク三月以降毎月兵一人当リ二畝植付ヲ実施セシメ七月ニハ一人一反一畝ヲ完了スル予定ナリシガ各部落ノ努力ニモ不拘三月以降ノ空襲ノ

ザル現況ナリ
(2)被服
本島産苧麻及竜毛織ヲ以テ補修材料ヲ織布シアルモ被服ノ衰損甚ダシク所要ヲ充足シ得ザル状態ナリ 現在迄二約一、三〇〇米ノ生産ヲ揚ケシノミナリ
尚芋麻ハ現地資源僅少ニシテ現在台湾ヨリ補麻混紡糸ヲ購入シ使用中ナリ
(3)畜産
紙ノ自活ヲ企図シ五月以降生産ニ従事セシモ技術者少キタメ製造所付近ガマラリヤ地帯ナルタメ成績ハ不良ニシテ五月以降終戦迄生産セシ和紙ハ六、〇〇〇枚に過ギザリキ
(註)各別表略

(4)九月下旬分給与分量(一人一日)
玄米 四二九グラム
甘藷 三七四 " 全員自活
生野菜 三〇六 " "
魚肉 三六 " "
缶詰肉 七六 " "
味噌 一 " "
粉味噌 一〇 " "
醤油 一〇、〇〇〇三立
粉醤油 一〇グラム
砂糖 二七グラム
食塩 一八 " "

(註)給与人員二五、〇七〇名(但し)實際の給与分量は本表に示された数字より下回っていたのではないかと推定される
(5)九月二十日現在の調べによると集團保有糧秣は玄米一、二九一ト、乾パン一九八ト、粉醤油二七ト、食塩三九ト、砂糖三八ト、トシなどが主なるもので、ほぼ二ヶ月間を支える量にあたる。

激化ノメテ予期ノ進捗ヲ見ザリシ一方初期ニ於ケル植付技術ノ拙劣ト六月中ノ干魃ト補給セラレ履行困難ハ今尚一人当五、五畝余ニ過ギザル現況ニシテ到底完全自活ハ不能ナル概況ニアリ、且終戦後ハ台湾ノ中国領土ニ伴フナリ、台湾所在船舶出港禁止ト宮古島ニ於ケル船舶不足ヨリ玄米ノ補給ノ途殆んど絶シアリ、之ガタメ内地掃蕩ノ順調ニ推移セザル場合ハ甚ダシキ状況ニ至ルモノト憂慮シツツアリ

(6)製塩
製塩ノ現地自活ハ甘藷ニ次グ主要ナル事業ニシテ集團ハ進駐直後特ニ意ヲ之ニ注ギ製塩場ヲ二箇所ニ開設シ銳意ノガ増産ヲ計リ最近ニ於テハ別表第五ノ如キ成績ヲ挙ゲ特ニ八月ニ於テハ集團所要量ノ約六〇%ヲ確保シ得ル程度ニ達シタルモ終戦後ニ於テハ天候不良ノタメ甚敷成績不良トナリ今後モ亦冬期間ハ進捗作ヲ自活不能ノ予定ナリ

(7)進駐当初ヨリ補給セラレシ缶詰ハ戦斗用トシテ使用ヲ嚴禁シ他面獸肉資源僅少ナル本島ノ肉資源ハ拳ゲテ魚肉ヨリ確保スベク鯧魚業アリ舟ニヨリ雑魚ヲ大々的ニ実施ノ計西ヲ樹立セルモ三月以降ノ空襲ノタメ鯧魚業ハ全ク不能トナリ決死の作業ヲ以テクリ舟ニヨリ雑魚ヲ獲得シ別表第六ノ如キ成績ヲ挙グルヲ得タルモ終戦後ハ民営トナリシタメ天候ノ不良ノタメ其ノ成績モ亦不良トナリタリ、之ノタメ集團ハ八月中旬以降缶詰肉ヲ使用シ肉食不足ヲ補充シツツアル現況ナルモ缶詰ノ手持数量ニモ限度アリ冬期ノ漁業不振期ヲ前ニシテ憂慮シアリ

(8)味噌
主要原料タル大豆、小麦ノ現地獲得量ハ収穫期ニ於ケル降雨続キノ為極メテ少量ニシテ次期ノ種子用トシテ充足シ得ル程度ニ過ギザリシタメ味噌ノ自活ハ甚ダ低調ニシテ別表七に示セル量ニ過ギズ集團ハ之方不足補充ノタメ目下粉味噌、粉醤油ヲ給与セシメツツアル現況ニシテ保有量モ日電十グラムトシテ今後二ヶ月余ヲ有スルニ過ギ

(9)先島集團主力の宮古島進駐後、大量の糧秣が船舶利用で運送されたが、十月以降は海上交通が危険となり、殆んど補給は杜絶した。追送された主要糧秣は次の通り(単位トシ)
白米 一、二〇四 食塩 七、四〇五
砂糖 一、二七三 玄米 七、四〇五
茶 五二 饅頭 四五
甘味品 一一 大豆 三九
小豆 一五 小麦粉 三三
漬物 二五 乾麵包 一一〇
缶詰 四五〇 味噌 二五九
醤油 一九六、五四七リットル
食油 一〇、四〇八 "
清酒 一〇、四〇八 "
煙草 五七〇、四〇〇本
携帯食塩 一、一〇キログラム
砂糖 一、六二〇 "

その他 一五、〇〇〇 "

四海軍関係の給与状況については資料がないので、明かないが、陸軍に比べるとかなりゆとりがあったのではないかとと思われる。
(10)なお集團の保有糧秣は復員後民間に払い下げられ、戦後窮乏した食糧事情緩和に役立った。
(註)別表は省略した。

第十章 終戦

(1) 停戦協定成立

米軍のホコ先が本土に向けられた七月以降米軍の重点方針は自衛に置かれ、軍民あけての食糧増産態勢が進められたが、この頃からは緊張感がやや弛み、食糧の争奪をめぐる軍民のトラブル、将兵の士気低下、厭戦気分などが見受けられるようになった。

七月二十六日歴史的なポツダム宣言が発表され、日本帝国は存亡の危機に立たされたが、無謀な軍部主戦派は本土決戦、一億玉砕を呼号して成算なき戦争をあく迄継続しようと狂気のあがきを続けた。

しびれをさらした連合軍(米)はついに原爆第一号を広島に、次いで八日長崎に第二号を投下、未曾有の惨害を与えた。政府及び軍部は国民一般に及ぼす影響を恐れて新型爆弾出現だけ報じ極力平静を装ったが、内心の動揺は避けられなかった。九日これに追い討ちをかけるようにソ連極東軍は日ソ中立条約の精神をふみにじて満州に侵入、精鋭兵力の大部分を引き抜かれてハリ子の虎と化した関東軍を打ち破ってまたたく間に全滿を席卷、日本は今や四方八方に敵の攻撃を受け断末魔の關頭に立たされるに至った。

斯くて十四日の御前会議で終戦の聖断が下され、十五日ポツダム宣言受諾が放送された。国民にはこの間の経過が秘密にされていたため、始め日本の無条件降伏は一般に理解されなかった。先島集團では軍民の動揺を避けるため、日本が負けたという印象を与えるのを避けるため、上級司令部から何らの指示がある迄は現勢のまま進むことを決め、有事即応の配備をくずさなかった。

十五日以降は敵機の来襲は殆んど見られず、ときたま偵察飛行が行な

われる程度で戦争は終ったという解放感が軍民の間に流れ始めた。一面連合軍の支配化に入った場合、どういふ取り扱いを受けるか、復員はどうなるか、台湾へ疎開した人々は無事に帰されるだろうか、など不安と焦燥感が入り乱れ、一種の虚脱状態が生れた。

集團では光輝ある國軍の有終の美を全うするため、軍紀風紀を厳ならしむるよう各部隊に命じ、一糸乱れぬ統制と団結を命じた。

十七、八日頃から少数の米軍機が飛来、投降勧告ビラを散布したが、第十方面軍から別命ある迄現体制を解かないよう指示を受けていたので、不問に付した。数日後方面軍より米軍の指示に従い、停戦交渉のための軍使を沖繩に派遣するよう指示が届いた。よって集團では米軍の指示に従って停戦についての交渉のため、軍使として独立混成第五十九旅団長多賀少将、集團參謀長一瀬大佐、岡村本參謀、海軍警備隊司令村尾大佐を第十方面軍差し回しの飛行機で沖繩に派遣した。

軍使一行は嘉手納の米軍司令部で停戦協定についての大綱を相談して帰還、二十三日集團長納見中将、一瀬參謀長、杉本參謀の一行が米軍機で沖繩に飛び、正式に停戦協定に調印、二十五日先島方面の日本陸海軍部隊に対し戦斗行為停止命令が下令され、完全な停戦が実現した。

翌二十六日米海兵隊准將の指揮する海兵隊およそ二千名が進駐、調査所下の広場にキャンプを張って日本軍の武装解除にあたった。

集團では兵器奉還と称してあく迄自主的に武装を解除する形式をとった。接収兵器は將校の私物である日本刀(軍刀)、ピストル、双筒鏡に迄及んだため、武装解除後は丸腰を余儀なくされた。然し階級章などは復員する迄着用することを許されたので、二応軍隊としての秩序、規律は保たれた。

終戦時における先島集團兵員数は宮古地区(歩兵第三十六聯隊を除く)

が將校一、〇八六名、准士官、下士官四、五〇三名、兵一八、二一八名、軍属七六四名、計二万四、五九一名、外に海軍部隊が二、五〇〇名、石垣島地区が將校二五二、准士官、下士官兵四、九二一、軍属二二九、計五、四一一名、外に海軍關係が三、三〇〇名、大東島地区が將校一六五、准士官、下士官六五二、兵三、七八八、計四、七〇五名、外に海軍關係一、六一四名、先島集團合計(海軍を除く)將校一、五〇三、准士官下士官五、四一四、兵二万六、八八八、軍属一、〇三二、合計三万四、七〇八名、各部隊から集められた火砲、重機、小銃、車輦、鉄カブト、被甲(防毒マスク)、彈薬などは各學校、中学校、海軍飛行場付近に集積され、監視兵が監視にあたったが米軍はこれらの兵器彈薬類を大型舟艇で渚水港沖に運び、惜げもなく海中に投棄処理した。ベトンで土台を固めた海軍砲台や高角砲台は撤去に時間がかかるので、ダイナマイトで砲座砲身を破壊したが、この際誤って若干の犠牲者が生じたようであるが宮古地区における武装解除は全般的にスムーズに運び、十月六日完了した。

杉本參謀及び外村中尉らは十月七日米軍機で石垣島及び南北大東島に飛び兵器奉還業務を援助した(大東島所属部隊は七月四日先島集團長の指揮下に入った)

集團では進駐した米軍が高飛車な態度で臨むのではないかということを懸念していたが、案に相違して紳士的で、勝ちおこったような行為がみられなかった。日米両側の間にはトラブルらしい事故は殆んど起らなかった。米軍は宮古島瀕海所に連絡所を開設して軍民との意志の疎通を図り、指示命令がスムーズに運ぶよう気を配ったので、一般から親近感を以て迎えられた。

武装解除によって米軍に接収された日本軍の軍需品種々は武器彈薬を除き、民間に払い下げられ、戦後の復興促進に役立った。又日本軍が民間から買い上げて造った軍用建築物は解体されて公共団体及び民間に払

い下げられ、公共建築物や一般住宅用に使用された。

(註) 本項は米軍側の記録と時日の点で若干くい違いがあるが、日本側の記録をもととして記述した。

(2) 万感胸に満つうちに軍旗奉焼

終戦後集團が一番頭を悩ました問題は軍旗の処理であった。万一米軍の手に入るようなことがあれば國軍全体の恥辱であり、建軍史上又とない汚名を遺すことになる。然し幸いにして米軍は軍旗の取り扱いについては何らの指示、容かきもなかった。大東島の指示に従って奉焼処分を決し、八月三十一日(資料によれば九月十五日)野原岳酒蔵司令部の中で納見集團長、集團幹部、各連隊長、旗手などが立ち会いの下に焼却した。

(一)日奉焼したのは歩兵第三聯隊、同二十聯隊、騎兵第二十八聯隊旗の三りゆうで、これにより歩三は創設以来七十二年、歩三〇は四十九年、騎二十八は五年の歴史を閉じた。又さきに第二十八師団の隷下に復した歩三十六は九月十五日聯隊本部前陣地に於て田村権一聯隊長立ち会いの下に奉焼され、創設以来四十九年の歴史を閉じた。

(3) 納見中将、降伏文書に調印

越えて九月七日沖繩本島嘉手納の米第十軍司令部前広場に於て南西諸島所在日本陸海軍代表による正式降伏調印式が行なわれた。

日本側からは陸軍を代表して先島集團長納見敬郎中尉、奄美守備隊司令官(独立混成第六十四旅団長高田利貞少将)、海軍部隊を代表して奄美地区海軍防備隊司令官加藤唯男少将、アメリカ第十軍司令部司令官ステューエル大將が調印した。

降伏文書には北緯三十度以南の琉球列島を無条件でアメリカに引き渡すことが約されている。

この降伏調印式には日本側から前記の三将星の外先島集団から一瀬参謀長、杉本参謀、奄美地区守備隊から独混第六十四旅団高級部員中津勝中佐が列席した。

なお加藤唯明少将は沖繩方面海軍根拠地隊参謀長として赴任の途中、戦斗が始まり、赴任出来なくなり、そのまま大島に止まり、防備隊司令官に任命替えされた。納見中将は沖繩本島守備の第三十二軍主力が全滅、南西諸島所在の陸軍指揮官としては最先行者になるため、その代表に指名されたものである。

(註) 本項は表紙グラビヤ版及び先島諸島の日本軍降伏(巻末)参照

(4) 戦火の犠牲軍官および三千名

昭和十九年五月陸海軍正規部隊の進駐以来二十二年二月迄の間在官官地区部隊の受けた人的損失については正確な記録がないので、明かではないが、一資料によれば

陸軍関係戦病死 二、四一九名
海軍 一五〇名

と記録されている。各部隊別の戦死者数については一部資料があるが、歩兵第三十連隊の場合、総員およそ三千名の二割以上にあたる三九一名の犠牲者を出している。

海軍関係には仮入隊の工具、遭難艦船の乗組員なども含まれるものと推定される。

将兵の戦死者の大部分(おそらく九十%近く)は「マリヤ」などの風土病、栄養失調などによるもので、食糧や医薬品さえ豊富であれば、これらの犠牲の殆んど避けられたのではないかとと思われる。戦死者は空襲によるのが大半で、若干名は海上での遭難死や事故死なども含まれる。

戦没将兵は所属部隊の手で火葬に付され、遺骨は野原越の納骨堂及び祥雲寺に安置されたが、戦後遺族の許に送り届けられた。

戦斗司令所の所在地であった野原越には終戦後日本軍の手によって陣

没将兵の慰霊碑と軍役動物(主として軍馬)の慰霊碑が建立され、今なお香華の煙りが絶えない。

遠く北満の地より征旅一ヶ年有半、酷暑しうれいひの地宮古島であらゆる困苦欠乏に耐えて祖国防衛のため勇敢敢闘、武運拙なく、空しく異郷の土に化して幾多将兵の忠魂の斗魂は永遠に島の守護神として光華を放つてあろう。謹んで冥福を祈る次第である。

なお記録によれば今次大戦を通じて戦火に斃れた軍人軍馬及び邦人は二六〇万名(うち陸海軍々々八九五万名)と推定されている。

(5) 慰霊碑の建立

戦後の昭和十九年秋宮古島で陣没した将兵(軍馬を含む)と軍馬などの軍用動物の霊を慰めるための慰霊碑が先島集団司令部の所在したゆかりの地、野原越に建立された。碑文は納見中将(在任中)の揮毫に成るもので、「陣没勇士の碑」及び「軍役動物の塔」と記されている。この二つの碑と並んで、納骨堂も建立され、陣没将兵二、四〇九柱が祀られている。以上は旧日本軍が復員する前に日本軍の手で建てられたもので、戦後一時友利明金氏(故人、元城辺青年学校長)が軍の委嘱を受けて管理にあたったことがある。

この外昭和四十七年佐賀県島橋市の篤志家野口誠成氏が建てた「豊魂の祀」さらに昭和四十二年平良市が南方同胞援護会の助成を得て平良市郊外袖山に建立した「豊旗の塔」などの慰霊碑があり、毎年六月二十三日の慰霊の日には例祭が執り行われ、平日も参拝者が少くなく香華が絶えない。

第十一章 納見中将の自決

(1) 戦犯出頭を前に

連合軍では戦後突進早やに戦犯の捕縛追及を行ない、多数の日本人戦犯容疑者が逮捕投獄されたが、二十年十二月一日納見中将はB級戦犯に指名された。容疑の内容は同中将が公訴提起を俟たずして自決、これが一瀬参謀長に洩らした話を断片的に総合して上海憲兵隊司令官当時の責めを問われたようである。同中将は少将当時昭和十五年十二月から十七年七月迄上海憲兵隊司令官として同方面の治安維持に任じたが、当時かなり熾烈化しつつあった抗日運動を終絶せしめるため徹底的弾圧を強行して抗日テロ団体の中核的存在として知られる「藍衣社」に属するテロ分子二十八名を一網打尽に検挙、全員処刑したと云われる。このことが戦後中国側の戦犯追及の対象にあげられ、容疑者として指名されたこととなったようであるが、この段階では宮古島に於ける米捕虜殺害は未だ連合軍側の知るところとはならなかった。この件は関係ないと思えるべきだろう。同中将は戦犯指名後官舎に引きこもり、沈黙黙考の生活を送っていたようである。自決の決心を固めていたようである。一瀬参謀長はこの心境を察し、爾後決然と参謀長限りに止め、原則として師団長官舎の立ち入りをする措置を取った。自決前夜の十二日参謀長、陸路、杉本両参謀長を招き、それぞれ遺品を与え、それとなく訣別。その後服毒したと思われる。遺骨はキチンと取り片づけられ、日常使用していた文机には勲章、日記帳等が置かれていた。遺骸は米軍の検死を受けたのちダビに付され、遺骨は専属副官豊島中尉が復員帰国した際、広島県尾道市木庄町市原に住むおはる米亡人に届けられた。死因については

遺族に累を及ぼすことを慮れ、脳出血と発表され、復員記録でも公務死扱いになっている。

(納見中将辞世)

勝ち國の法や如何にも我き得む

踏みし忠義の道は変らず

故納見中将略歴

一、明治二十七年六月二十日広島県尾道市木庄町市原に生る。陸軍幼年、士官学校を卒業大正四年歩兵少尉任官。大正九年一月ペリヤ出兵、ザバイカル州チタに進駐。大正十年五月九日凱旋、敦賀上陸、十一年十二月陸大入學。大正十四年陸大卒。昭和元年陸軍大臣官房勤務。同五年任歩兵少佐、教育總監部勤務。同八年一月七月ヨロ教育總監部付、十二年八月教育總監部庶務課長。十二年十一月一日歩兵大佐。十三年七月歩兵第四十一聯隊長、支那事変に出征、広東、北海に上陸、三水占領。十四年一月青島へ進駐、九月遼北道憲正作戦、九月北海及び南寧上陸作戦に参加。十五年八月憲兵司令部本部部長。十五年十二月二日任陸軍少将、上海憲兵隊司令官。十七年八月一日憲兵学校長。十九年一月十六日台湾憲兵隊司令官。十九年六月二日任陸軍中将。二十年一月十二日補第二十八師団長。故納見中将は陸士二十七期、前任者の橋本中将(二十四期)より三期後輩、第三十二軍長参謀長(二十八期)より一期先輩にあたり、先島集団関係の同期生には歩兵第三十六聯隊長田村權一、大佐、独立混成第五十九旅団司令部高級部員豊島中佐などが居る。同中将の人となりについて杉本参謀は「秋霜烈日、頭腦明晰、綿密周到、細部に至る迄自ら検討して満足する迄止まない、果敢実行型の将軍だった」と述べている。

従って挙措進退も喧ましく、自己にきびしい反面、部下に対する態度も極めて厳格で少しミスがあると遠慮会釈なく怒鳴りつけるので、気の休まる思いがしなかったと、ある幕僚は回想している。中将は着任直後宮古地区の作戦準備が予定より大幅に遅れていることに気付き、不満を抱いていたようで、神経質とも思われる程細事にわたっても監督の手を弛めなかった。ある日(着任後一週前後とも云う)の如きは早晩司令部勤務の全将校を叩き起し「作戦準備が成っていない、真剣味に欠けている」と大目玉を喰わし、震え上がらせたという一幕もあった。

これは前任者の楠洲中将が女房役の参謀長に陸大出の俊才福地少将を擁し、幕僚の大半も満州時代からの子飼組が占め、氣質、性格、能力などについても一通り知悉気心も通じ、上下の信頼関係が確立されていたのに反し、納見中将は憲兵畑から飛び込んできた第二十八師団にとっては一種の新参者で馴染がうすく、又一瀬参謀長は陸大出と云っても専科出身、前任の福地参謀長とは同期(三十二期)ながら進級は五年も遅く、着任後ようやく大佐に進級すると云った調子で素質に於てもかなり見劣りがされ、納見中将としても部下の能力、人間関係について未だ全副的信頼を寄せる迄には至ってはいなかったと云えよう。更に前任者と違って余りにも強烈的な性格をもつ新師団長に部下が一種の戸惑いを感じ、畏怖、或は敬遠する傾向が生じ、司令部内の空気は必ずしもシッカリしない、因を作ったのではないかと思われる。

当時先島集団長の職下、指揮下部隊(第三十二軍直轄となった歩兵第三十六聯隊を除く)には将官三名と九名の大佐が居たが、陸大出身は独逸第五十九旅団長多賀少将のみで、参謀陣は何れも専科(参謀要員の速成教育のため設けられた修業年限一年の制度)出身の二流クラスに過ぎず、人一倍綿密な納見中将としては万事一任という心境には到底なれなかったのではないかと思われる。

多賀少将は陸大本科出身だが、陸士は納見師団長より一期先の二十二期、ただし陸大入学は二年遅く、少将進級は昭和十七年、納見中将より二年も後塵を拝している。経歴からみてもさほど出色した将軍とは思わ

れないが、師団長はかなり信頼していたようで、相談相手になっていたらしい。

安藤少将は陸二十二期の古参少将だが、経歴は配属将校、聯隊区司令官などおおよそ第一線勤務とは縁が遠い、所謂閑のあたらない三流どころに終始し、平時なら大佐止まりを思わせる一般的な将官に属し、目立つような人物ではなかったようだが、性格は温厚そのもので部下からは信望があったらしい、然しその軍歴などに徴しても師団長が部下からの片腕として信頼を托す迄には至ってはいなかったと見るのが妥当ではあるまいか。

次に聯隊長クラスでは騎兵第二十八聯隊長の上田大佐が比較的受付けが良く、親しかったようだ。同大佐は熊本師団在職中、荒木貞夫、香椎浩平、谷寿夫中將ら四代の師団長に副官として仕えた経験があり、気難かしい納見師団長の氣質をよく呑みこんでいたようだ。第二十八師団の聯隊長クラスでは十九年十月輻重兵学校長に栄転して宮古を去った輻重兵第二十八聯隊長の横山伊一郎大佐(のち少将)に次ぐ最古参で、同期には師団兵器部長幸田野造大佐が居るが、幸田大佐は聯隊長転出の機会を逸し、大佐止まりで終った。

この外の聯隊長クラスでは歩兵第三連隊の怡土大佐、同第三十聯隊の富沢大佐、山砲第二十八聯隊の堀大佐は何れも二十八期で師団長より一期後輩、怡土、堀大佐は美観の経験も豊富で戦場帰りの古強者と云ったタイプで陸路参謀の回想によればイザ参謀となつた場合、一番信頼出来るのは堀大佐ではなかったかと云う。輻重兵聯隊長の宮川と陸士五十二期の新進氣鋭の青年将校で南方で砲火の洗礼を浴び行動も積極果敢師団長のお氣に入りて接融する機会も多かった。

参謀陣では先任の陸路中佐は三十八期、満州チナレ、ハルビンの特務機関に在勤、参謀勤務は第二十八師団が振り出し、後方任務を担当していた関係で捕虜管理の責めを問われ、貧乏クジを引く羽目になったが性格はオットリ型で、細かくて性急な師団長とは肌合いが合わず、師団長からは余り受けはよくなかったようだ。特に師団長が自任にあつた

捕虜処刑についての資料を遺さなかったため部下に及ぼした結果になったことは関係者にシコロを残り、割り切れない感情を抱かせることにもなつたようである。一説によれば楠洲中将が、福地少将か、何れかでも残っていたこのような事件を惹き起さずに済んだのではないかと

の見方もあるが、首肯出来ないことでもない。

作戦担当の杉本参謀は十九年夏少佐転出のあとを受けて師団参謀に補職された有為な将校で陸士四十二期、支那事変では大隊長として参戦一時大本営に勤務したこともあって頭脳明晰、行動力に富み、命令即時実行を要求する師団長から重用されていた。たまたま福地のうちでは出色の部下に属した方だったようだ。高級副官の浜中佐は三十九期、如才のない副官タイプ、又幸田兵器、三浦経理、脇田軍医の各部長は一般的に有能な将校と云ってよく、師団長との折り合いが特にとどうとうとはなかったようだが、併せても楠洲師団長当時の司令部の空気が新師団長の着任後はガラリと変わり、ビビリした緊張感で包まれるようになり、一種の異和感が生じたことだけは否定出来ないようだ。

(2) 復員急ピツチで完了

終戦後先島集団が当面する大きな緊急課題は二万七千名近い軍人軍属の復員であった。現地徴集の将兵は九月一日付で全員復員を終つたので問題は無いが、残りは海上輸送によらねばならないので配船がどうなるかが問題だった。

開戦前五百数十万トンの商船を持ち、世界第二の海運国として七つの海に雄飛した日本はその有する船舶を殆ど失ない、外航に耐え得る船舶は僅か二十八万トンに過ぎなかった。終戦時外地には陸軍二八六万人、海軍四十万人、それに軍属や一般邦人を加えるとおよそ六百万人が帰國の日を待っていた。これら龐大な人員を手持ち船舶だけで運ぶとすれば僅に十カ年近く要する計算となり、

連合国側の全面的協力がなければ解決は不可能だった。

集団では斯かる現況と見通しに立つて復員完了迄は二カ年を要すると判断、長期残留計画を樹て食糧確保に万全を期すと共に九月二十四日海軍飛行場と測候所構内に連絡所を開設、米軍との連絡を密にすると共に復員業務のスムーズな運営をはかったが、将兵の帰心は矢の如く明けても暮れも乗船の連絡が何時あるかに関心が集つた。

十月二十日復員船第一号(海防艦第一九二号、宮古島近海の掃海のため派遣された)が連絡要員、患者などを乗せて出発した。

十一月に入り連合国側は海外からの日本人帰還を促進するため、リパティ型輸送船二百隻の貸与を決定、復員業務は一気に進む運びがいつ皮切りに本格的な復員輸送が始まった。そして二十一年一月末迄には一部の現地満期者と沖繩本島の作業援助のため送られた部隊を除いて全員の復員を完了した。

納見中将亡きあとの集団長代理安藤忠一郎少将、一瀬参謀長、陸路参謀などの集団司令部職員は二月上旬最後の復員船で出発、故國の土を踏んだ。

沖繩に送られたのは歩三、独立歩兵大隊などから抽出されたおおよそ二千名で歩三の怡土聯隊長の指揮の下に二十一年十月迄労役に服したが、そのあと全員本土帰還を許された。

作業隊の編成について入選に問題があるとして不平や抗議が出たようだが、表面的なトラブルはなかった。何れにしてもこの作業隊に組み込まれた将兵はお蔭で復員が一年近く遅れ、云々は貧乏クジを引いた訳で入選に不満を持たうことは首肯できる。これにつき当時これが入選を担当した司令部付の某将校は名譽作製の基準は米軍の指示によつたものである特定の部隊を意図的に作業隊に組み入れたような事はないと述べたもので、宮古島戦犯事件発覚の端緒が作業隊に編入された某中尉の口から洩れたことから推して戦犯追及と作業隊の入選とは何らかの関連があったのではないかと推定される節がある。

第二部 記録篇 (雑録)

内地への帰還輸送は大体次の順で行なわれた(途中一部の変更があった。人員は二十年十月三十日現在)

順序	部隊号	輸送人員	摘要
1	独混59旅団	三、三〇二	
2	船工三ノ一中	三二八	
3	二〇五飛大	三九七	一部残留
4	二六対空無線	五一	
5	独立四警戒隊	一四二	
6	要塞建築八中	二二二	
7	陸勤一〇九中	三一	
8	築城四中隊	九八	朝鮮人軍夫32含む
9	築城五中隊	一〇一	” ” 31”
10	作井九中	一〇二	
11	独歩三九七大	五七三	
12	作井八中	一〇五	
13	特機砲四七中	八三	
14	独自二八四中	一三四	
15	野重一連ノ一大	五八〇	
16	戦車27連ノ三中	一一三	
17	独機一八大隊	三三四	
18	30海灣基地大隊	七七九	
19	四 ” ”	七六八	
20	四連総経隊	五八	
21	独速五大	四一四	
22	独混六〇旅団	二、七〇六	
23	水動一〇一中	四三三	鮮人軍夫三七九
24	病馬収養所	一〇	
25	兵器修理所	一一	
26	制毒訓練所	一一	
27	工兵二八連	四九八	
28	山砲二八	二、三五九	
29	騎兵二八	四九四	
30	歩三〇	二、八四九	
31	独速二五中	一三六	
32	師団司令部	四一一	
33	一野病	九七	
34	歩三	二、六一九	鮮人軍夫13
35	独速二六中	一三一	
36	兵器支廠	二七三	
37	貨物支廠	一四八	
38	第四野病	一五八	
39	師団通信隊	四五二	
40	防疫給水部	二二二	
41	宮古陸病	一一二	
42	輜重兵二八連	七五〇	

計三三、九三二(うち鮮人軍夫四五八名)

(註) 部隊名は一部改編などの関係で若干の変動がある。又部隊名は歩三(歩兵第三聯隊)独速二六中(独立速射砲第二十六中隊)のように略して記載した。

第一章 宮古島戦犯事件

(1) 米飛行士を処刑

連合国では戦後時を移さず、戦犯追及を徹底的に行ない、内外地に於て多くの戦争指導者や軍関係者が軍事法廷で断罪されたが、昭和二十一年後半になって果敢宮古島で米軍航空機塔乗員一名が不法に処刑されたことが突き止められ、捜査が進むに伴ってその全貌がうかがい上げられてきた。

沖縄戦中、宮古島上空及び近海で日本軍対空砲火によって撃墜された米軍機はおよそ四十機を算えたと云われるが、そのうち陸上に落ちたのは十数機と推定される。海上に落ちた航空機の塔乗員は時を移さず飛来した味方の水上機や救難機によって殆んど救い上げられた。陸上に墜ちた機の塔乗員はパラシュートで降下した次の四名を除いて殆んど機と運命を共にしたが、死体は近くの日本軍部隊の手で收容され、丁寧に埋葬、目印になる十字架が建てられた。

問題は陸上に降下して捕虜になった塔乗員の身柄がどうなったかであった。これについての公式資料による。

- 一、昭和十九年十月十三日 宮古島南海岸に降下一名、十九日那覇の第三十二軍司令部に送付
- 二、二十年一月九日 西海岸に不時着一名、十五日那覇へ送付
- 三、二十年四月二十九日 降下一名、七月十九日輸送機で台湾へ送付したが、機が墜落、操縦士ら合わせて九名死亡、遺骨は台湾へ送付
- 四、二十年五月十九日 西海岸に降下一名、海軍警備隊の手で台湾へ送付

以上の四件が記録されているが、米軍の調査の進むに伴って不審の点

が発見され、更に追及を続けるうち、ついに戦後宮古島から沖縄の米軍作業隊に編入された歩兵第三聯隊の某中尉（二世出身と云われる）の口から捕虜殺害の事実が明るみに出た。殺害された捕虜は一時歩兵第三連隊が管理していたことがあったので、歩三関係者は比較的その消息に通じていたようである。

これによると、昭和二十年四月二十九日午後三時頃米艦載機一機が地上砲火によって撃墜されたが、塔乗員はパラシュートで脱出、野原越付近に降りたところを付近の日本軍に捕えられ、師団司令部へ送られた。情報係係長が訊問した結果、米空軍少尉ジョセフ・フランシス・フロレンスと名乗り、台湾東方海上の米空母から飛び立ったと供述した。司令部ではこの身柄取扱いについて考えた結果、台湾へ送ることになったが、この頃になると航空機による連絡は杜絶え勝ちで、又飛行場も連日の空襲で破壊され、離着陸は甚だしく危険を伴うようになっていた。止むを得ず輸送のメドがつく迄抑留することをきめ、憲兵隊に身柄を預けたが、そのうち給養や糞棄施設などに不自由になってきたので、同人身柄を歩兵第三聯隊長怡土大佐に一任した。怡土大佐は同人を中飛行場での不発弾解体処理作業に使用したが、何分危険を伴う仕事であるので、就業をいやがり、又食事がまずいと不平不満が多く、取扱いが面倒になったので、身柄は再び司令部が管理することになった。そのうち台湾への輸送の途がつかなくなり、あらためてその取扱いが問題になった。

六月二日敵米攻の公算が大きくなったので、乙戦備が下令され、捕虜を何とかせねばならなくなった。これについては幕僚の間でも種々討議されたようだが、結論は出なかったという。納見師団長は憲兵畑を歩んできた関係もあって捕虜の取扱いについては経験知識が深く、国際法に

も通じていたので、決め兼ねていたようだが、七月上旬銃殺以外方法なしと判断、捕虜管理の責任をもつ陸路参謀に対し、処刑実施を命じた。この命令に瀨参謀長が関与したか、どうかは後日問題になったが、参謀長は軍法廷で臨時地視察のため司令部を留守にしていたので、知らなかった。司令部に届達してから報告を受け始めたことと述べている。(この件については軍隊の指揮構成上、参謀長が関知しない筈はないという見方と、納見師団長の性格から考えて参謀長を差し指して敢て担任者に下命することも十分あり得るとの見方があるようだが、肝野の納見、一瀬両氏が故人となつた今日では推測の域を出ない。)

このような一札を経て七月十一日ワローレンス少尉は監禁所から引き出され、野原岳ふもとの窪地で射殺された。記録によると処刑は夜間実施されたようで、あらかじめ掘つた穴の前で畑野伍長が先ず後頭部を拳銃で射撃して倒し、捕縄を外して穴に投げ込み、外の三名がそれぞれ一発づつ浴せて息の根を止めた。遺体はそのまま埋葬されたが、戦後掘り出して火葬に付し、遺骨は一尺四方の白木の箱に入れ、台湾軍司令部あて送った。

この事件について戦犯の責めを問われたのは陸路参謀四名で、昭和二十三年七月二十六日横濱軍法廷で次の如く判決が言い渡された(求刑は行なわれていない)。

- 重労働三十五年 第二十八師団参謀 中佐 陸路富上雄
- 重労働九年 第二十八師団司令部付 中尉 外村奥次
- 重労働三年 第二十八師団司令部付 曹長 竹内次郎
- 重労働三年 憲兵伍長 畑野耕三

訴因は陸路参謀が処刑命令及び遺体の処置が適切を欠いた罪、外村、竹内、畑野の三被告が捕虜を不法に殺害又は関与した罪となつてゐる。米軍法廷では瀨参謀長及び武田憲兵分隊長にも追及の手を進めたようだが、両氏の言分が認められて責めを問われなかった。ただ両氏に對して戦犯関係者の間から責任転嫁も甚だしいとして非難と怨嗟の声があつたことは事実のようである。各被告は処刑が師団長命令によるもの

第二章 精強皇軍の裏に

(1) 国軍未曾有の不詳事件

酒乱將校、部下三名を斬殺

第二次大戦を通じて、国軍内で幾多の不詳事件が発生したが、軍の威信を保つため、その多くが闇から闇へと葬られ、殆んど外部へは洩れなかつた。大戦末期の十九年頃は士気の低下、軍規の弛緩、秩序の紊れが著しくなるに伴つて先島集團管下の各部隊のなかから幾つかの不詳事件が起つた。事件の処理は第二十八師団に法務官不在のため、那覇の第三十二軍々法會議でなされた。然し二十年三月以後は交通が杜絶、事件送致が不可能となつたため、師団内に臨時軍法廷を開設、應下將校のうちから法律に明るい適任者を選んで臨時に法務官、檢察官を命じ、事件を処理した。

宮古島で発生した軍刑法違反事件については記録や資料が残っていないので、全般を明かにすることは出来ないが、一部についてのみ記述することにする。

(その一) 昭和十九年秋(一説によれば十一月)平良町五原で発生した乱射將校による部下三名殺害事件は国軍史上稀にみるものだった。事件の概要は大体次のようなものである。

十九年秋平良町五原部落に駐屯した某部隊の隊長が替り、新隊長のA大尉が着任したので、民家(隊長の宿所先?)で部下の主だった將校下士官が集まって歓迎の宴を催した。A大尉はアルコール分の強い地酒(泡盛)をかきやる量呑んで酔倒、余興に日本刀を振り回して剣舞を始めた。舞い終つた途端、B曹長が氣を利かして刀の鞘を差し出したところ納めようとして誤まってB曹長の胸を突き刺した。血をみて興奮したA

であることを強調したか、納見中尉は自決にあつたって何らの遺書を残さず、又捕虜についての記録は戦後焼却されていたので、これを立証する手段を得られず、結局前記の四被告が貧乏クジを引く結果になつたのである。

ところで納見中尉が何故この頃(七月に入つて敵の攻撃の重点が本土に指向され、宮古島をめぐむ状況はやや緩和されつつあることが看取された)になつて敢て捕虜処刑を決断したかについては適確な資料は得られないがこの点について杉本参謀は次の点が必要ではないかと述べている。

- 一、捕虜の性格が素直でなく、取り扱いに手苦痛つたこと
 - 一、不発弾解体作業に使役された関係で外歩きの機会が多く、従つて中地区の陣地配備などについてある程度の知識を持っていたので、敵來攻の際、万一敵手に落ちた場合、日本軍に不利な情報が出れる虞れがあると考えられた。
 - 一、空襲の激化に伴つて收容施設や給養上に不便を生じたこと
 - 一、無差別爆撃によつて軍民の被害が重なり、敵愾心が盛り上がったこと
- さらに捕虜処刑について上級司令部(台北の第十方面軍司令部)に對しあらかじめ連絡又は指示を知りたが、どうかについても資料が得られないが、前後の事情から推測して納見師団長が独自の判断に基いて処刑を命じたのではないかと思われる節が多く、この点事件関係者に取つて極めて後味の悪いものになつたようた。

大尉は同席のC軍曹、D兵長、E軍曹を次々と刺し、会場は騒動場と化した。B軍曹とC曹長は殆んど即死、E兵長は陸軍病院で応急手当を受けたが数時間後に死亡、D軍曹は背中を負傷しただけ一命を取り止めた。兇行後A大尉は一時茫然となつていたが、暫くして我にかえり、犯した罪の重大さを知るや矢庭に隣室に飛込み、拳銃で自決しようとしたが、部下に制止されて果さず、身柄は憲兵隊に拘留、一応の取り調べが終つたあと、那覇の第三十二軍々法會議に送られた。軍法廷では事件当時A大尉が飲酒、心神喪失状態にあつたと云うので情状酌量(このほかに戦局の急迫も判決に影響したと考えられる)の上、禁固十五年(一説では無期)の宣告を受け、沖繩刑務所(軍命により軍人軍属の未決、既決囚をも收容していた)で服役した。当時本土との交通が杜絶し、軍刑務所へ送致することが不可能だった。

下手人のA大尉は剣道の有段者で手練の持主だったが、日頃から酒癖があり、酔うとよく軍刀を振り回すことがあつたので、部下から警戒されてたようだ。下獄後間もなく沖繩戦が始まり、五月下旬刑務所が解散となつたので、同大尉は職員と共に南部に落ち延び、六月二十三日頃百名部落に於て米軍に投降、無事帰還、一時潜伏生活を送つていたが、前非を悔い数年前病歿する迄三名の遺族に慰料として月々送金したと云う。

本事件は部隊にとつて極めて不名誉なものとして関係者は口を緘して語らず、負傷して生き残つた軍属のD氏はこんな不愉快な事件は思い出しただけでも嫌だと、事件に触れることを避けていた。

(註) 関係者の強い要望により部隊名及び関係者の氏名は伏せることにした。

(2) 船舶工兵隊の集団逃亡事件

(その二) 時期は明かでないが(二十年夏頃と推定) 船舶工兵隊の兵八名が舟艇を利用して集団で逃亡した事件があった。嚴重なる捜索にも拘らず、終戦進行方は不明。台湾、西表に漂着したか、或は海上で遭難したか、今だに消息は分らないと云う。

(3) 上官侮辱で懲役三年

昭和十九年十一月一日夕方独立歩兵大隊所属の上等兵山口某は無断外出、飲酒の上、平良市西里の映画館新世界に於て巡察将校(師団司令部付A中尉)に咎められて反抗し兵隊をそう苛めるものではないと怒鳴り、上官侮辱に問われ、第三二軍々法会議に送致(當時は未だ宮古、那覇間の交通は細々保たれていた)。十二月七日上官侮辱罪で懲役三年を宣告され、小倉陸軍刑務所へ移送された。事件干渉裁判官は陸軍少佐井上茂、法務大尉田村常雄、大尉和才則雄。

(4) 終戦後も軍事法廷

(その三) 終戦後の軍法会議判決は有効、無効かは今日でも刑法学者の間で問題とされているが、なかでも死罪(執行済み)の場合、敵前逃亡、投降、辱職などの罪に問われたとした場合は釈然としないだろう。終戦後八月二十七日開廷された台湾軍臨時軍法会議部(第二十八師団の通称号)法廷に於て独立大隊所属の山北、内海両上等兵は同年六月二十四日より二泊三日の公用外出許可を貰い、外出したが、指定日時迄補隊せず、引き続き四日間も留守にした事で、陸軍刑法第二十條及び第七十五條第二項に該当するとして各々懲役六ヵ月(但し執行猶予一年付)を言い渡された。干渉檢察官(職務取扱い)憲兵大尉武田茂一、判士は陸軍少佐玉木孝司、同那須憲三、法務官代理裁判官職務取扱中尉鈴木正長。

(註) 法廷は野原越の集団司令部内に設けられた。
(その他) 前記の外にも若干の刑法犯があったと考えられるが、軍法会議送致事件があったか、どうかは不明。なお将校クラスにも職權濫用で懲戒処分(佐官二名を含む)に付されたのも若干あったようである。

第三章 英太平洋艦隊の先島群島作戦

一九四四年夏英国は東洋艦隊の強化と対日戦への本格的介入を決め、十一月二十二日かねて懸案の太平洋艦隊を編成、セイロン島に旗艦を掲げるフレゼラー大將のもとに実際に洋上で指揮をとる次席司令長官にロリングス中将を、又空母部隊の指揮官にバイアン少將を任命した。
英太平洋艦隊の配置については米側例によってマッカーサーとニミッツとの間に意見が分かれた。マッカーサーはフィリピンとボルネオ

の上陸支援兵力として使用することを力説し、ニミッツは沖繩戦への投入を主張したが、結局ニミッツの主張が入られて沖繩戦への参加が決定した。然し英艦隊は米海軍のウルシーに匹敵するような前進基地を欠き且洋上補給が可能な程度の艦隊補給のシステムを持っていないので、主として民間のタンカーによる前進基地での補給システムを採用せざるを得なかった。この点については米英両国間の協議でアドミラルティ

イ諸島のマニウスを共同使用することで了解に達した。

当時米海軍としては沖繩戦を控えて英太平洋艦隊の参加を歓迎しないわけではなかったが主戦力である空母陣に関しては、一九四四年末迄に合計十四隻のエセックス級の就役が見込まれており、その他にも多数の軽空母、護衛空母が就役しつつあるので、特に兵力に不足はなく、むしろ新参者の参戦でチームワークを乱されることを嫌がったのが実情のようである。

沖繩戦略作戦(米側はアイバーグ作戦と呼んでいる)は、一九四四年十月頃より計画を推進された。太平洋戦争中、最大の規模をもつ上陸作戦で、上陸予定日「L」デーは再三の延期の末、一九四五年四月一日に決定していた。

沖繩戦における英太平洋艦隊(米海軍の指揮下では第五十七任務部隊と呼ばれた)の任務は沖繩島の南西にある先島群島の日本軍航空基地を制圧することであった。具体的には先島群島の中心である宮古島と石垣島にある六カ所の飛行場(実際にはそれぞれ一カ所の海軍航空基地があったに過ぎない)を攻撃し、台湾方面からの増援部隊がここを中継地として利用することを防ぐのが眼目である。

第五十七任務部隊はウルシー出撃後、途中洋上補給を行ない、二日後に先島群島の南西三百海里に接近した。

ここで改めて第五十七任務部隊の編成を見ると、空母四隻(インドミタル、ウィクトリアス、インデファイティガブル、イラストリアス)戦艦二隻(キングジョージ五世、ホウ)巡洋艦五隻(スイフトシア、ガンビア、ブラックプリンス、アゴノート、ユリアス)駆逐艦十一隻(うち二隻はオーストラリア艦)がその全勢力で、空母の搭載機は二三機であった。英空母の搭載機が米空母に較べて著しく少ないのは飛行甲板、格納庫側部に装甲を施し、格納庫を一段におさえていたためである。これら空母の対空兵装は四、五インチ連装高角砲八基を中心にした二ポンド、ポンポン砲八連装六八基、二十ミリ機銃三十六三十八門であった。

三月二十六日早朝、第五十七任務部隊(以下第五十七任務と略す)は宮古島南方百哩に接近し最初の戦斗機を発進させた。帰還したパイロットは対空砲火の激しいことを報じたが、引き続き攻撃隊が発進し、二カ所の飛行場を爆撃した。夕刻と共に夜間戦斗機を欠いている艦隊は南方へ後退し、翌日再度前日と同じ地点に進出して攻撃隊を放ち、同様な攻撃を繰り返した。攻撃を更にもう一日続行する予定は台風の接近で中止され、補給作業が実施された。

第五十七JFの任務は先に述べたように先島群島所在の航空基地制圧であったが、実際に作戦を実施してみると、夜間を利用して日本機が進出しており、飛行場の使用を完全に封じることがなかなか困難であった。二十八日から三十日の間補給作業についていた第五十七JFの代わりに米護送空母群がその任務を続行した。

四月一日午前六時少し前、沖繩周辺にたむろした上陸支援艦隊による一斉射撃によって沖繩上陸の幕は切って落された。と同時に第五十七JFに対する特攻攻撃の幕も切って落されたのである。

この日インデファイティガブルのアイランド基部に突入した最初の特攻機は、早朝石垣島を発進した第一大機隊(爆撃機六機)の一機で、対空砲火によって火災が発生したにもかかわらず、冷静な操縦によって見事体当たり成功した。このためインデファイティガブルは飛行甲板前半部に火災を生じたが、二時間後に発着作業が可能となった。これはいうまでもなく装甲飛行甲板のため、乗員の被害も負傷者十九名を出したのみであった。他にインドミタルの艦首をかすめた一機が艦首近くの海面で爆発し、同艦の飛行甲板前部に破片の雨を降らせた。

駆逐艦ウルスターも急降下爆撃機の至近弾によって損傷し、修理のためレイテに去った。

こうして英艦隊はヨーロッパを離れて対日戦に参加して以来初めての日本機による戦火の洗礼を受けた。しかも首にきこえた特攻機の攻撃はまことにすさまじいものがあった。ポンポン砲による弾幕もさして効き目がなく、ポフォース四十三ミリ機銃と二十ミリ機銃の増強が必要とされ

た。
連日上空の直衝戦闘機と対空砲火の網目をおかして落しても落しても特攻機は突入してきた。しかし第五十七JFはこのような状況にもかかわらず先島群島に対する制圧作戦を続行し、四月十日一日の第四次攻撃完了後レイテに帰還する予定であった。

この間イラストラリアスも艦橋に特攻機の命中を受けたが損害は軽かった。四月初旬のこの時期、特攻機は米艦隊にも恐るべき猛威を揮い、たまりかねたスプリアンス提督は第五十七JFに対し、特攻機の集結基地とみられる台湾北部航空基地の攻撃を命じた。四月十二日早朝、第五十七JFは台湾北部に接近し、四十八機の爆撃機と四十機の戦闘機を派遣させた。目標の二カ所の飛行場のうち、一カ所は雲が低くて発見できず、目標を基隆港に変更した。翌日も攻撃が続行されたが、日本機の反撃は弱く、わずかに一機を失ったのみで日本機十六機を撃墜した。

四月十四日第五十七JFは作戦を終了して後退した。ここでかねてから入渠整備を必要としていたイラストラリアスが戦線を退き、代わってフォーミダブルが第五十七JFに加わった。

二十日に再度先島群島の攻撃を実施したのち同日夕刻第五十七JFは約一カ月にわたった作戦行動を終了してレイテに向った。

五月四日しばしの休養をとった第五十七JFは再び作戦海域に戻り、先島群島に対する攻撃を続行することになった。今までの攻撃があまり効果的でないことを知ったローリングス中将は今度は艦砲射撃を計画し四日正午過ぎ艦下の戦艦、巡洋艦を動員して宮古島の飛行場に約四十分間にわたって猛砲撃を加えた。

この間空母部隊は約二十機の特攻機に襲われた。戦闘機のスクリーンを突破した三機が空母めがけて突入し、うち二機がフォーミダブルとインディゴに命中した。これらは台湾の宜蘭を発進した第十七大隊隊の爆撃機と思われるが、インディゴでは命中した特攻機は飛行甲板でパウンドして海中に転落したため損害はほとんどなかった。しかしレイトリアスと交番したばかりのフォーミダブルはついでに同艦の

飛行甲板前半には午前中の攻撃を終えて帰還したばかりのコレシアとアベンジャーがバークしていたため、特攻機の命中と共に飛行甲板は火の海となり、塔撃機は次々と火を吹いた。結局同艦は十一機の塔撃機を失い、五十五名の死傷者を生じたが、飛行甲板は深さ約六十センチの窪みが出来ただけで夕方までに発着艦作業が可能となった。午後も特攻機の攻撃は続き更にヴィクトリアスが傷ついた。

六日から七日にかけての補給作業中、フォーミダブルは負傷者を病院船に移し、新たに航空機の供給を受けた。八月九日は攻撃日で例によって先島群島に対する制圧が続いた。

好天にめぐまれた九日の午後五時頃、少数のグループに分かれた日本機がまたも防衛スクリーンを突破して進入し、再度フォーミダブルとヴィクトリアスに突入した。これは四日の場合と同じく宜蘭基地を発進した第十八大隊隊の零戦で、フォーミダブルはまたまた後部に発進準備中の塔撃機が多数あったため大火災が発生し、十八機のアヴェンジャーとコレシアを失い、死者二十二名を出した。しかし一時間以内に甲板はクリアにされ、発進作業が再開された。ヴィクトリアスでは前部リフトの付近に命中し、火災を生じてリフトも故障を起こしたが、続いて第二機が突入、飛行甲板でパウンドして海中に転落した。しかしコレシア四機が破壊されただけで被害は少なかった。これが英空母に命中した最後の特攻機である。

五月十八日フォーミダブルは三度目の炎難に見舞われた。補給作業中格納庫に火災を生じ、三十機の塔撃機を焼失したのである。このため同艦は一足先にマニウス経由でシドニーに向かい、その他の艦も五月二十五日作戦を終了してシドニーにコースをとった。

このように第五十七JFはレイテでの八日間の休養をはさんで六十二日間を海上で過ごし、うち二十三日は戦斗に従事して五隻の空母から延べ五、三三五機が出撃した。投下爆弾は九五八トンド、他に機銃弾五十五万発、ロケット弾九五〇発を発射しており、さらに艦砲射撃で二百トンの砲弾を打ち込んだのである。戦果としては九十八機の日本機を撃墜、

第四章 米軍 南西諸島の日本軍降伏

この記録は琉球列島の日本軍の降伏に伴う主な出来事を伝えるものである。なおここに記述された日本軍の行動は第十軍司令部の断乎たる命令でとられた行動である。

一九四五年八月二十六日午後六時四十三分第十軍司令官ステイルウェル大將(註・沖縄で戦死したバグナ中将の後任)は九月二日後に琉球列島の全日本軍の降伏に応じるよう作戦命令を受けた。

第十軍が真先にとるべき処置は琉球各地の日本軍指揮官と連絡をとることだった。その結果、まず重要な島々にメッセージを空中投下することから行動を開始することになった。

次に徳之島、宮古、石垣、西表、喜界、奄美各島の高級指揮官において命令書が和英両文で作製された。この命令書は全部で二十四通作製され、八月二十八日午前十一時三十分それぞれメッセージ袋に詰められて東部の第五十空軍第三四五爆撃部隊に届けられた。第五百爆撃中隊からB25ミッチェル三機が北部各島へ向け飛び立ち、第一〇一爆撃中隊からも同じく三機が南西部の先島群島へ向け飛び立った。編隊は各島に超低

空で到着するやメッセージ四通を投下、うち二通は主要飛行場または海軍施設の上空でそれぞれ投下された。両編隊とも同日午後七時四十分までは帰還して空中投下に成功した旨報告した。塔撃機は投下されたメッセージ袋の多くが回収されるのを実際に目撃している。報告によると地上からの対空砲火は全然なかった。また投下目標地の住民には敵意は認められなかったと第五百爆撃中隊は報告している。

八月二十九日午前三時、まず徳之島の陸軍指揮官高田利貞少將(註・独立混成第六十四旅団長)より次の回答が受領された。

「八月二十八日午後八時本官は無線連絡確立に關する同日付の貴メッセージ第一号を受領せり。本官の無線連絡は五〇九〇キロソाइグルをもってす」

この回答に引きつづき徳之島無線電信局より輿論、喜界、奄美大島、沖之水長部、南大東各島に連絡した旨報告してきた。

次でステイルウェル大將は降伏の打ち合わせをなし、各隊、飛行機、船舶潜水艦の正確な所在を報告し得る権限のある代表者を第十軍司令部に派

遣すことを命じたメッセージを奄美、先島両群島に、伝達するよう指令を発した。これに対し高田少将から次の回答が受領された。

「貴メッセージ第五号に回答す、本官は只今琉球列島総指揮官横山勇中將(註)奄美群島所在部隊及び先島群島所在部隊は当初第三十三軍の編成内であったが、昭和二十年五月末奄美地区は第十六方面軍、先島地区は第十七方面軍の直轄下に入っているため、これは翻訳のあやまりと思われる。より命令受領中、本官単独にては即時回答は不可につき横山中將に連絡の上回答したし、御承知あり。奄美大島地区の海軍もまた本官の指揮下にあらず。よって連絡の上直ちに御通知するつもり。当基地には飛行機はなく、船舶も小型モーターボートを残すのみなり」

南西部の宮古無線電信所からは第二回目の今度は強硬なメッセージが宮古、石垣両島に投下されたのは、八月二十九日午前八時四十分最初の連絡が入った。それによると、指示を待って待機中であるということであった。その後間もなく午後十時三十分に至り、第二十八歩兵師団長納見中將のメッセージが宮古からあり、先島群島及び大東島を含む沖繩諸島の全陸海軍に代り講和条約締結する権限が同中將にある旨連絡してきた。そのなかで納見中將は軍使派遣を指示した。メッセージの受領を確認するとともに九月二日に軍使一名を派遣できると、ただし軍使の搭乘する飛行機については同機が台湾より確保されたこととあらためて詳細に報告すると述べている。この間高田、納見両指揮官は連合軍の捕虜の存在についても報告するよう指示されたが先島群島には捕虜は皆無であること、かつ以前に捕虜になった者は全員沖繩または台湾に移動済みである旨回答があった。

一方奄美群島の高田少将からはフランク・ジー・コリンズ少将(〇一六六四五八)およびジー・ダブリュー・マクドール海軍少尉(三三七八七二)の両人を捕虜として收容中である旨の回答があった。両人の身柄は第七空軍の飛行機を使用して引き取ることが決まり、まず連絡機二機を徳之島飛行場に着陸させて飛行場の状態を調べた上で良好であればC-1四七機一機を着陸させて兩名を引き取るようになった。このため同飛行場への日本人の出入はC-1四七機を迎えて飛行場の状態を説明し兩人の捕虜を引き渡す日本軍将校二名を除き全面的に禁止された。

(ヘドノ)(註)徳之島) 飛行場は爆弾による破裂口だらけで、その上日本機の残骸が散乱していることが分ったが、徳之島代表者を迎えるための米軍機の飛行は予定通り行なわれた。使用された米軍機はL52機で第十軍代表者と共にダブルユー・エム・コーナリー少将とエール・エイ・ホッグス大佐が搭乗、機は同飛行場の一部修理済みの箇所に着陸した。飛行場にはコリンズ少将とマクドール海軍少尉が待機していたが、自由の身となつて米國製短艇、チューインガム、水の飲料を受けた二人は狂喜した二人の健康状態は良好のようだった。抑留中の取扱いは他の場所の連合軍捕虜よりもよかつたと言ふことだった。まずしらのパイロットと日本軍整備員が合同で飛行場の状態を調査したあとC47機が無事に着陸、コリンズ少将、マクドール海軍少尉、日本軍代表中溝益中佐(註)独立混成第六十四旅団司令部高級部員、副指揮官佐藤貞夫(註)副官のあやまりとと思われる二名(うち一名は英語が話せなかった)が乗り込んだ。この間海兵隊のコルセア戦闘機八機が低空で飛行援護し文情を示した。C47機は無事離陸、午後四時無事脱谷飛行場に着陸した。

午後六時三十分日本軍代表全員は参謀長室に案内され、そこで短時間の協議が行なわれたあと各自の指揮官に対する指示事項を伝達され、同夜運くまで指示事項の内容について検討した。翌朝第十軍参謀長フランク・デー・マイル少将と会見、降伏指示項の内容について多少質問することが出来た。同日午後一時日本軍代表一行は脱谷飛行場を出発した一方宮古派遣代表一行は少々ガタつた日本軍爆撃機で飛来した。居合せた米軍飛行隊員一行はこの日本爆撃機に非常な興味を示した。徳之島派遣代表一行はC74機で出発した。

九月六日降伏文書に正式署名する日本軍指揮官及び幕僚数名を連れてくるための手配が完了、G二部のラーセン大佐がC47機で南西方面に出発、宮古で納見中將その他を搭乗させた。宮古代表の一行は次の通りである。

同日納見中將から代理人として多賀少将、村尾海軍大佐、一之瀬大佐、杉本中佐、通訳(二名)操縦士(五名)が決まった旨の連絡があった。九月四日正午に宮古北端で米軍護衛機に合流するというところである。奄美群島の海軍指揮官加藤唯男少将からは九月二日最初の無電連絡があり、第一回の投下メッセージの受領を確認するとともに英語を解する無電技師と通訳が不足のためメッセージ投下による連絡を続行されたしと連絡してきた。これに対し代理人を第十軍司令部に飛行機で派遣すると同時に他の指揮官が要求されたと同様の報告を携えてくるよう指示した回答が九月二日投下された。このメッセージを受領した加藤少将は直ちに飛行機はないが、徳之島から派遣される高田少将代理人同行で代理人を沖繩に派遣する旨回答してきた。

これら日本軍代表者の九月三日沖繩着にそなえてすでに飛行機が待機していたが、同日またまた台湾北西沖に台風が発生したため宮古派遣の代表者を連れてくることは出来なかった。また徳之島の飛行も悪天候のため中止された。

九月二日天候の回復とともに同日午後日本軍代表者を集合させるための手配が無電連絡によりなされた。南西部の宮古派遣代表者一行は九七式機に搭乗、宮古を出発して同日(九月四日)正午宮古上空で米軍護衛戦闘機隊に迎えられ、そこから説谷に向かって飛行し午後三時五十分に着陸した。飛行基地で米軍の迎えを受け、宿舎である第十軍司令部内の特別調査本部に案内された。

行場への日本人の出入はC-1四七機を迎えて飛行場の状態を説明し兩人の捕虜を引き渡す日本軍将校二名を除き全面的に禁止された。

九月二日徳之島の高田少将から副官と兵一名を同伴の上、本人自身第十軍司令部に出頭する旨の無電連絡があった。これに対し第十軍司令部は本人自身の出頭は望ましくないの代理人を派遣すること、また飛行機には米人捕虜引取りに使用された輸送機を使用するよう指示した回答が送られた。

同日納見中將から代理人として多賀少将、村尾海軍大佐、一之瀬大佐、杉本中佐、通訳(二名)操縦士(五名)が決まった旨の連絡があった。九月四日正午に宮古北端で米軍護衛機に合流するというところである。奄美群島の海軍指揮官加藤唯男少将からは九月二日最初の無電連絡があり、第一回の投下メッセージの受領を確認するとともに英語を解する無電技師と通訳が不足のためメッセージ投下による連絡を続行されたしと連絡してきた。これに対し代理人を第十軍司令部に飛行機で派遣すると同時に他の指揮官が要求されたと同様の報告を携えてくるよう指示した回答が九月二日投下された。このメッセージを受領した加藤少将は直ちに飛行機はないが、徳之島から派遣される高田少将代理人同行で代理人を沖繩に派遣する旨回答してきた。

これら日本軍代表者の九月三日沖繩着にそなえてすでに飛行機が待機していたが、同日またまた台湾北西沖に台風が発生したため宮古派遣の代表者を連れてくることは出来なかった。また徳之島の飛行も悪天候のため中止された。

九月二日天候の回復とともに同日午後日本軍代表者を集合させるための手配が無電連絡によりなされた。南西部の宮古派遣代表者一行は九七式機に搭乗、宮古を出発して同日(九月四日)正午宮古上空で米軍護衛戦闘機隊に迎えられ、そこから説谷に向かって飛行し午後三時五十分に着陸した。飛行基地で米軍の迎えを受け、宿舎である第十軍司令部内の特別調査本部に案内された。

行場への日本人の出入はC-1四七機を迎えて飛行場の状態を説明し兩人の捕虜を引き渡す日本軍将校二名を除き全面的に禁止された。

北緯三十度、東經一三二度三十分から原地点
九月七日午前十一時二十分、第十軍司令部戦斗司令部に於て正式の降伏調印式が執り行われることになり、シャーマン、パーシング両戦車、一五五ミリ自動推進砲を出場させるほか陸海軍のライフル銃兵小隊が、参列することになった。

同日午前十時三十分、この降伏調印式を一目見んと一般兵士が統々と到着、周囲の高地の見やすい場所に陣取った。午前十一時第二五九陸軍地上部隊のバンドが演奏を始めこの吹奏がしばらく続いた、間もなく下記の高官が来賓として式場に現われた。

第八空軍司令官 中将 セームス・エイチ・ドウィット

第九十六機動部隊指揮官 海軍中将 セイ・ビー・オルデンドルフ

第一海兵師団長 少将 デウィットヘツ

第七空軍 准将 トーマス・デイ・ホワイト

第七空軍副指揮官 准将 カール・ビー・マクダニエル

第七機動部隊司令官 准将 ローレンス・セイカー

午前十一時二十分過ぎ、ライオン大佐の案内で日本軍指揮官一行は納見中將を先頭にしてその場にならべられたテーブルと椅子の後ろの席を占め、残りの者はその後ろに列に並んで立った。

午前十一時三十分スチルウェル大將が現われ、そのあとからメル少將と二世の小田軍曹が姿を見せた。ライフル銃兵小隊は不動の姿勢となり、小太鼓の音とともに参列者全員一斉にスチルウェル大將に敬礼した。スチルウェル大將は小田軍曹の通訳を通して一本官の指示事項を実行する責任を貴官ら自身に負っていただく」と降伏にのぞんだ日本軍指揮官に告げた。まず最初に納見中將が六通の降伏文書に署名し、続いて高田少將、加藤少將の順で署名が行われた。次にスチルウェル大將が歩み寄って降伏受諾の書類に署名してから日本軍代表一行に向って立った。

スチルウェル大將は小田軍曹の通訳で「これで調印式を終る。貴官ら

は宿舎に戻つてよろしい」と話し、このあと降伏文書の写しが一通づつ署名した日本軍指揮官各自に手わたされた。次にスチルウェル大將曰く「これで太平洋を支配した將軍たちは姿を消すのだ」

以上で降伏調印式は正式に終了し、ここに南西諸島（琉球）より成る島々は米國に移管されることになった。日本は一八七九年以来九州から台湾にまたがる諸島を所有し続けてきたのである。

午後十二時三十分日本軍代表一行は謀谷飛行場に降り、飛行機で各自の基地へ向かった。南大東は先島群島指揮官納見中將の指揮下にあつたが、通信不良のため同島の部隊への命令の伝達が徹底しなかつた。これより先に多賀少將は第十軍に対し同島の部隊に降伏指示事項を伝達するよう要請してあつたが、速かに降伏条件に服従させるため、第十軍は同要請を認め九月八日第七空軍の飛行機を使用して特に指示文書を南大東島に投下させた。

同日宮古から無電通信あり、指示通り先島群島および南大東島の武器弾薬集積場所を報告してきた。九月十日の朝フツチャンナン大佐の率いる一行が下検分のためC47三機に分乗して牧港飛行場を飛び立ち、宮古の平良飛行場に着陸した。

一行は同島（離島をも含む）の病氣、衛生状態、飛行場、海上からの上陸地点を調査するよう指示されたものだが、滞在期間は三日限りであつた（以下略）

（註）この記録は日本軍が現地で作製した記録と多少食いちがう点があるが、そのまま掲載した。なわ人名の一部は音読によつた。

第三部 地元官民の活動

(1) 戦災を避けて島外疎開

政府は十九年七月七日の閣議で南西諸島（沖縄、宮古、八重山の諸島）からおよそ十万人の老幼男女を台湾及び九州へ疎開させることを決め、これが実施についての指示を沖縄県知事に与えた。これは沖縄が直接米軍の攻撃を受ける公算が大きいとみて、戦斗の足手纏いとなる婦女子を他地域に移し、作戦行動がし易いようにすると共に人命の犠牲を最少限に止めるのが狙いだった。

宮古での疎開業務は支庁、警察が主体となり各町村の協力を得て八月頃から本格的に進められたが、当時海上交通は敵潜水艦の襲撃で極めて危険になっていた。当局は船舶の遭難を極力秘密にしていたが、一部は民間人の間にも洩れていた。

大島近海では既に十八年夏から十九年末にかけて嘉義丸（貨客船、二、五〇九トン、大阪商船）湖南丸（貨客船、二、六六四トン、大阪商船）宮古丸（貨客船、一、〇二二トン）疎開船対馬丸（貨客船、六、七四五トン）などの遭難が相次ぎ、多くの人命が失われていた。このような状況を反映して当局の懸命なる勅めにも拘らず、疎開業務は当初捗らなかつた。理由は他郷での生活不安、大黒柱である主人や家族と別れるに忍びないという心情的なものや途中で遭難を憂える気持が主なもののようだったが、状況が段々険悪になるに伴って次第に浮足立ち、疎開希望者は踵を増えるようになった。

宮古、八重山からの疎開先としては台湾が指定され、軍の輸送船や小型機帆船を利用して輸送が行なわれ、十月一杯ではほぼ終ったが、宮古からおよそ一万人が台湾へ渡ったものと推定されている。これらの疎開民は殆どが海路無事目的地に到着、戦後海上遭難の一部を除き、全員が引き揚げていく。

なお男子の青年は原則として疎開の対象から外されていたが、なかには事務連絡、疎開地視察など公務に藉口して脱出する指導層も統出、

統後の結束と士気を素すものとして問題になった。

(2) 軍官民の決戦態勢強化

集団では軍官民の融和を図り、決戦体制を確立するため、陸路参謀、青木県議らの肝入りで、「七日会」と称する軍民連絡懇談会を設け、十九年十二月七日県農業会支部（町内下里の川上大輔商店内）に於て初会合を開き、軍官民の親睦をはかった。

出席者は集団側から陸路、杉本兩参謀、浜高級副官、官民側から納戸支庁長、青木、西原両県議を始め各官舎長、市町村長団体、新聞代表らおよそ二十数名、議題は特になく、雑談程度だった。この会合は青木県議が十二月末県会出席のため上沖したので、二回ほど開いただけだった。

この外次のように軍官民の接触が行なわれた。

(一) 先島集団長柳瀬中将は二十年元旦料亭月見亭に地元官民代表（支庁長、市町村長、民間団体代表）を招き、年始の宴を催し、顔合わせを兼ねて懇談した。

(二) 新集団長納見敏郎中将は二十年一月地元官民代表を司令部（平一校）に招き、新任の挨拶を行なうと共に戦局の逼迫を説き、奮起を促した。席上陸路参謀は各地区隊の担任を発表、宮古の戦場化必至を示唆した。

(三) 二十年二月十五日頃敵大機動部隊南西諸島方面へ近づくの飛報至り集団では麾下全部隊へ戦備強化を下令したが、同日午後宮古支庁長とん室に官民代表の参集を求め、民間の避難地の指定、食糧確保などについて指示、協力を申入れた。

敵上陸の場合、一般非戦闘員をどの地域に收容するかについては集団でも研究していたようだが、平良は添道一帯、城辺、下村は野原越を中心とした空地あたりを考えていたようだ。陸路参謀の回想では各主要陣地の中間地帯に誘導收容する計画だったという。